

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 7 9 号

鵠沼の歴史的家屋をたずねて④

米国から輸入した日本最古の組立住宅

——関東大震災にも耐えたわが家語る 内藤 喜嗣 1

座談『鵠沼むかし語り』

——本村地域に残された生活と慣習

..... 萬福寺住職 荒木 良正ほか 13

鵠沼の森銑三氏 松岡 喬 38

新資料発掘 写されていた東屋の生活

——宮田敏夫氏所蔵のアルバムから発見 高三 啓輔 45

公民館主催「鵠っ子スクエア探訪スペシャル」同行記 中島 明 51

「鵠沼を語る会」活動の記録 総務委員会 54

「塩沢コレクション」に寄せて 有田 裕 57

編集後記 58

『新編相模風土記略』（天保13年、1842）に、「鵠沼村久久比奴末半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

鵠沼の歴史的家屋をたずねて④

米国から輸入した

日本最古の組立家屋

——関東大震災にも耐えたわが家を語る

内藤喜嗣（「鵠沼を語る会」会員）

東京松屋呉服店（現銀座松屋デパート）の支配人をしていた私の祖父・内藤彦一が、大正9年7月、鵠沼村字下岡の南の端6672番地に、米国から輸入した組立家屋を建てた。それが現在の鵠沼海岸1-9番地先にあるわが家なのである。建築以来79年、部屋の増築などいくぶん手の加わったところはあるが、関東大震災にも耐えて、ほぼ原型を保ったまま残っている。

いまから4、5年前、住宅史を研究されている文化女子大学内田青蔵助教授（当時）が、突如、わが家を訪ねられ、この組立住宅を調べていかれた。その結果、この家は外国から輸入された組立家屋としてはわが国最古のものであり、また現存する唯一のものであるということが分かった。

内田助教授は住宅総合研究財団の研究年報にそのことを発表されたが、この家で生れ、育ったものとして同助教授の説などを参考にしながら、わが家の歴史をまとめておきたい。

◆ 輸入までのいきさつ

もともと私の祖先の地は山梨で、明治初期、祖母の実家を中心とした一族が京浜地区へ出て来て事業を展開した。明治中頃にはその事業も軌道に乗り、鎌倉に別荘を構えるほどになっていたようだ。大正時代、祖父は銀座に住み、日本橋今川町の店に通っていた。当時、日本橋茅場町で同業の呉服店を営んでいて祖父と仕事上関わりのあった伊藤清氏が鵠沼村字下岡6672番地に二千坪の土地を求め北側奥に別荘を構えていた。これが機縁となって祖父と鵠沼の関係が生じた。祖父はこの二千坪の土地の半分、前庭の部分一千坪を伊藤氏に請われるままに引き取ることになるのである（登記上は大正10年10月1日、祖母志んが購入したことになる）。

祖父が買い取った土地は、片瀬の山本橋から日の出橋を通り辻堂にぬける旧道に面しており、南は上鰯の海浜で砂山がうねって海辺へととなっていた。北はと言うと東屋の南東の鯉取橋（現サイゼリア裏で今はない）から続く低地から南西風に吹き上げられて出来た砂丘地帯で富士見坂の上、東の最高所の沼間敏郎邸（後に三井邸、現日本鋼管保養所）までうねりながら盛り上がっていた。下岡6672番地の後藤たま邸の南端（現鵜沼海岸1-9-17あたり）と6642番地三輪善兵衛邸のほぼ中央（現1-12-6あたり）に大きな池があったものの、クロ松の植樹もままならなかったようである。

また、東隣の後藤、北側の伊藤両氏からは富士山の眺望を妨げる工作物の構築、高い樹木の生立を禁止する申出を受けていた（眺望の地役権で、大正10年10月に登記をされた）。

祖父は避暑をかねて伊藤氏の別荘を訪れ、波打ち際まで砂山以外何もない聞きに勝る現地を状況を見てまわり、境界のぼさ柵造りや周囲へのクロ松の植樹などを命じ、いろいろ思案をしていたらしい。

たまたまこの頃祖父は東京商工会議所の議員をしていて、後に同商工会議所会頭となる藤山雷太氏や勸業銀行総裁を務めることになる志村源太郎氏らとともに財界活動をしていた。当時、東京商工会議所は活動目標の一つに生活改善運動を掲げ、生活の簡素化、住宅難問題などに取り組んでいた。

そうした中で祖父が住宅難問題解決の一策として注目したのが、米国の組立家屋（プレハブ住宅）の輸入、活用だった。その住宅を鵜沼の地で実験的に導入してみようと腹を決めたらしい。こうして米国シアトルにあった住宅会社アメリカン・ポータブル・ハウス社（American Portable Houses Co.）の組立家屋（プレハブ住宅）が選ばれて発注され、鵜沼の地に送ってこられることになった。

祖父はこの発注から住宅完成までのいきさつを大正9年、日本建築学会発行の専門誌『建築ト社会』10月号に聞き書きの形で発表している。これを見ると祖父自身が組立家屋とは何なのか、よく分からないまま発注した様子がよく分かる。

以下（二重カッコ内の文章は同誌からの引用）祖父の記述にしたがって当時の模様を見てみよう。祖父は同誌でこう言っている。

『所謂住宅難問題に就て、従来多少共考へては居たのであるけれども、さて此方面からも理想的なりと言はれる米国の組立家屋のカタログを初めて見せられた時には、實は何にが何んだかちつとも見當が付かなかった。勿論私が建築其物に就て全然素人である為めでもあるが、組立家屋などと云った處で、先方で云う如

くにそんなに無造作に出来るものであるかどうかといふ先入の疑問が手傳うからである。』

しかし、ともかくアメリカン・ポータブル・ハウス社に注文状が発送された。

『カタログによると二室で三百六十五弗位のものからあるのだが、丁度私の鵜沼にある土地に相當したやうなものと思って五室のものを注文した。しかし何と云っても前に申上げたやうに、全然その出来上った家屋の様子が想像も出来なかったの、兎に角取寄せて見て駄目だったら損をしたらば良いのだからふ位の考でゐたのである。五室で代金七百五十弗で二十五坪許りもあるのだから、即ち家屋代價のみでは、換算一坪當り六十圓に成る譯で、物価騰貴し坪二百圓三百圓を稱へてゐる日本の現状から見て、驚く程の安値であると申さねばならぬ。』

◆ 初物輸入で税関もびっくり

注文状を送ってから2ヶ月後の大正9年4月、日本では初めてのものとなる組立家屋が、横浜港に到着した。ところがびっくりしたのは、横浜税関も同じだった。初めての物だけに通関業務は混乱し、結局は割高な買い物になる。その混乱ぶりを祖父はこう言っている。

『注文状を発してから丁度二箇月目に横浜へ入ったが、何しろ日本では初めのものなのであるから税関では吃驚して、此處で色々な問題が持ち上がった。

第一が此組立家屋に對して、加工品としての關税を徴すべきか、それとも材料としての關税を徴すべきかといふ事だが、加工品とするには、餘りに材料なりと判定せねばならぬやうな點が多い。然りとて單純に材料として扱ふには、例へば硝子窓（硝子迄がちゃんと入ってゐる）だとか扉（引手もついてゐる）だとか、壁板（板と板との間に毛が入れてあって、外界との溫寒の影響を受けぬように實に巧妙に制作されてある）だとかは餘りに加工されてゐるので、すったもんだの結果、先ず加工品と見做すべきが至當といふ事に決定して、其割で關税は、單価の四割、即ち換算千五百圓に對して六百圓を徴収された。

これなども、組立家屋に對して智識の無かつた為めで、加工品と材料品とを別々にして關税を受ければ、私は百圓内外で行くであらふと今になって考えて居る。その上斯の問題で長い事税関へ留められたものだから、露出してゐる木の面がごたごたに汚れて始末に負えなくされて仕舞った。』

こうした曲折を経て、組立家屋の材料は鵜沼に運ばれて来た。

『木質は亜米利加白松だが、何れも大きな木から挽き出したもので、節など減多には見當らぬ位だし、夫々必要な處には桁なども立派に出てゐて申分がない。

此材料を鵠沼に運んで、さて愈々建てるとなったが、私の依頼した技師の和田順顯氏も初めて出喰はしたのだし、實際仕事をする大工も初めてだといふ譯で、却々手につかない。それに先方から附いて来た設計の説明書が、建築の學問上の言葉を使わずに、職工用語で書かれているとかで、第一これからが解らない。しかしまあ柱やら板やらについてゐる符號を力にしてやって見る事になったが、その結果は、案ずるより産むは易しの例の通りで、土臺工事を終わってから一週間も經ずに、立派な家が出來て仕舞つたのである。

始め組立を大工に受負はせた處が、大工も薄気味が悪るいので、更に鳶の者へ八十人で受負はせたのだ、處が、それが僅か三十人分で出來て仕舞つた。この組立費用に私は千圓以上も使ったが、これもまた馬鹿氣た話なので四百圓位で充分なものである。其上材料を税關で減茶苦茶にされ、お負けに鳶も馴れないので、板や柱の表面はアメリカで一本澁い色の薄い防腐料で外板だけを塗って来ただけでは如何にも汚らしくて不可なくなつたので、私は更にペンキを塗らせたが、これ杯は將來全然無用で其費用約五百圓を無駄をした。此處で大体出來上る迄の費用を計算して見ると。

實 價	千五百圓	→だが、しかし私は實際に五千圓	→實 價	千五百圓
運 賃	二百圓	許り費した。運賃は同時に三戸	運 賃	二百圓
關 税	六百圓	分輸入して五百圓拂つたからそ	關 税	百 圓
組立賃	千 圓	の割で二百圓としたものである	組立賃	四百圓
ペンキ塗	五百圓	従つて二五坪一戸で坪當り二百	ペンキ塗	〇 圓
合 計	三千八百圓→	圓以上と成つたが、こんな事は	合 計	二千二百圓
		再び繰返す必要はなく、先づ右→		

で、こんな次第だから、一坪百圓以下の見當にならねばならぬ筈だし、且又經驗上の事實に於て充分に之れ以下で出來るのである。』

◆現在の木造プレハブ住宅の先駆けだった輸入組立家屋

実は祖父が最初に購入した組立家屋の部材は（一棟分がセットされ、現在のコンテナ風に梱包パッケージされていた）三棟分だったさうだが、他の二棟は税關で三パッケージ共に開封されたため部材が混在し、結局一棟にまとめられ熱海方面

で建てられたそうだが詳細は不明である。祖父が注文、建築した組立家屋は「パネル工法の組立家屋」と呼ばれるものだが、これと同じ組立家屋が1921（大正10）年5月にも輸入され陸軍少将の佐藤安之助氏の自邸として市ヶ谷加賀町に建てられた。これとは別の上級のメールオーダーハウスの「桝組壁工法の組立家屋」が1910（明治43）年末には住宅専門会社「あめりか屋」の橋口信助氏により輸入、竣工しているので、輸入組立家屋としてはこの方が古く、従って厳密に言えば祖父の建てた住宅は「パネル工法の組立家屋」しての輸入第一号とすることになる。「桝組壁工法の組立家屋」は1922（大正11）年に東京帝国大学の長井長義教授が東京市外渋谷町青山の私邸に長義、長男、長女のそれぞれの住まいとして木造二階建3棟を建てられた。そして同形のものが1923（大正12）年の震災の前に東京小石川の丹波博士の自邸としても建てられていた。これらの組立家屋は祖父のものも含め全てが関東大震災に立派に耐え、計らずもその計算された安全構造の価値が立証される結果となった。

この時期、『新住宅』編集長大熊喜邦氏の1920年9月号での「組立家屋来る」の記事に始まり『建築世界』『建築画報』などの建築関係雑誌や『婦人之友』『主婦之友』等の生活関連雑誌、単行本などで、関東大震災を挟んで1930頃まで盛んに組立家屋に関する賛否両論が報道されたが。しかし、行政の関税を含む障壁が総ての利点を押さえ込むこととなり、普及に至らなかった。

戦後に生活様式が欧米風に変わり、昭和から平成になり、貿易の自由化でようやく、障壁の緩和と適正な関税で、アメリカ、カナダをはじめ北欧のスウェーデン、ノルウェーのログハウスなど「桝組壁工法の組立家屋」が75年余の歳月を経て普及を見たのである。祖父らの建てた「パネル工法の組立家屋」は現在の木造プレハブ住宅の開発の基礎になったと思う。

◆ 組立家屋をすっかり気に入った家族たち

『家屋は、先月中頃に、全く完成したので、私は二度許りわざわざ泊りに行って見たが、私よりは子供や家内が頗る気に入って、すぐに掛けてずっと避暑がてらに住んでゐる。組立といふから如何にもがさがさして、板と板、柱と柱との継ぎ目などに空隙が出来てゐて、バラック建か何んかのやうな感がするが實物は却々そんなぞんざいな物では無く、普通の粗末な西洋建てなどよりは、ずっとがっしりしてゐて立派なものである。（次6頁の写真、図1など参照）

屋根もスレートのやうな板を並べれば良いだけなのだが、如何にも完全だし、



1920（大正9）年8月、完成当時に作成の絵葉書、左より父（長一）母の姉（鶴子）母（少女、恒子）祖母（志ん）周りは砂地で、後ろの松も植えたばかり

Portable Houses

OF ALL DESCRIPTIONS

For
Permanent
Residence



Or
Summer
Cottages

American Portable House Co.
319 ARCADE BLDG, SEATTLE

1904年当時のアメリカン・ポータブル・ハウス会社の広告（「SEATTLE CITY DIRECTORY, 1904」P. 1391より）



「建築と社会」誌 1920（大正9）年10月号掲載から『初めて我國に輸入されたる組立家屋にして、相州鶴沼に於ける東京松屋呉服店支配人内藤彦一氏の別荘也』とある

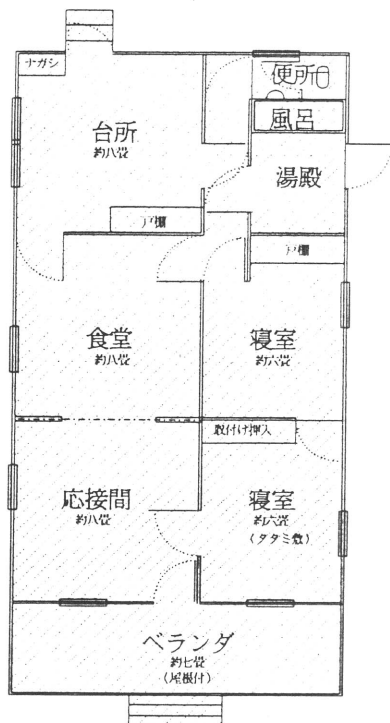
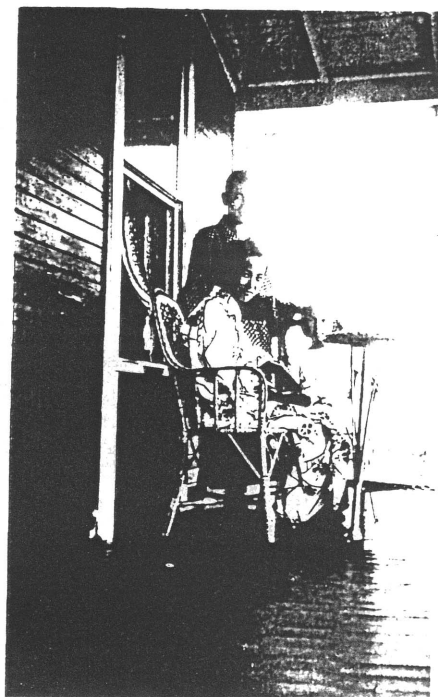


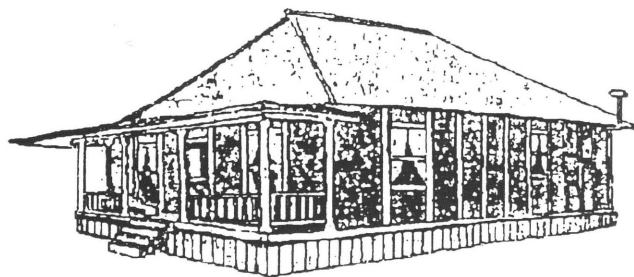
図1 内藤邸創建時の平面図
（『建築と社会』誌 1920（大正9）年10月号記事「初めて組立家屋を取り扱って」より）
（1999.6.10. 母恒子の確認を得た）



完成当時のベランダで左より父、母の姉、母（恒子、少女）



1923（大正12）年東京大震災の後
ベランダの前で父



南正面から見た内藤氏の別荘（イラスト）
「主婦之友」誌1920（大正9）年10月号掲載より

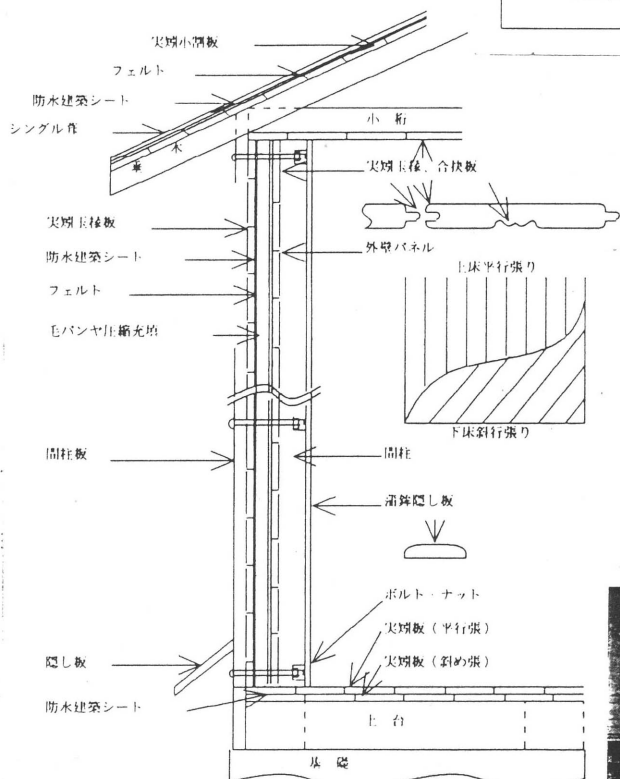
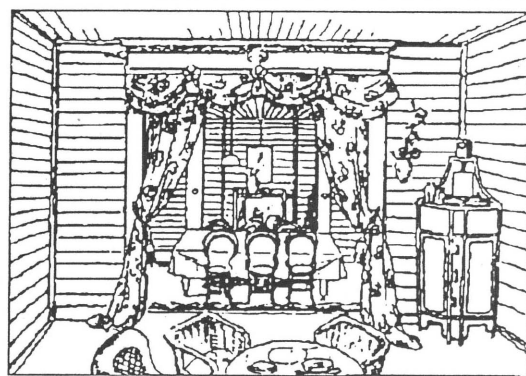
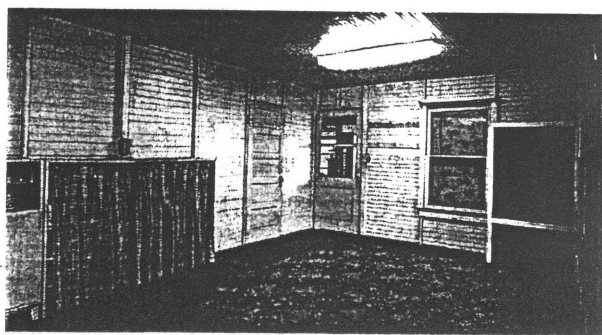


図2 組立家屋の一部の断面と用語開示



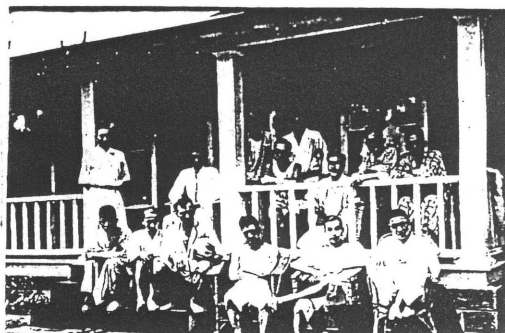
内藤氏別荘の室内の一部（イラスト）
「主婦之友」誌1920(T9)年10月号の掲載記事の挿絵



内藤邸内部の現状



1931（昭和6）年夏
後の松がだいぶ育っている



1929（昭和4）年夏
社員研修にも使われていた。

柱などは日本建のやうに無闇に穴が開いてゐないから、何處か頑丈な気がする。床板は二重張になって、その間には黒いゴムのやうな防腐紙が一枚敷かれるから、湿気とか、床下から風が吹き上げるとかいふことは決してない。窓は三尺の七尺だが、部屋の中は至極明るくなつてゐる。

先づ玄関は一間に三間半のベランダになつてゐて入ると直ぐが八疊の客間、それから同じく八疊の食堂、八疊の臺所、六疊の寢室二つ、この外に浴室と便所があるのだが、第一こんな小さな家に比べて八疊の臺所があるので、女共の喜ぶ事一通りでない。如何にも簡易で一點申分ないが、只われわれ日本人が住むとしては、押し入れと云ふやうなものがないので困る。で私は仕方なく六疊の寢室一つの中へ押し入れを附けると今度はどうも疊が敷いた處がないと、落付かなくて困ると云ひ出したので、この六疊へ疊を入れ、長火鉢を持って行って、まあ茶の間といふ格構にして家内達が暮してゐる。純西洋の中へたった一間だけ日本風の室を造つた次第だが、大して不調和でも無し不便でも無いやうである。

家屋其物の総ての様式が萬事がアメリカ式で權勢張らぬ處が気に入ったし、避暑地の別荘などとしては申分ないが、さて此組立家屋を東京のやうな繁華な都會の眞中に持って來て建てたら如何かといふ問題だが、私の取つたものは、この都會家屋には一寸向かないやうである。それも広い高臺の庭園のある地とか何とかならば別だが、どうも家が低過ぎる。勿論これは私の家の話で、先方の會社では、どんな設計圖でも送つて呉れば、一戸や二戸で無い限り直に造つて送ると云つてゐる。われわれの住宅を建てるのは、ほんのバラック式のものにしても尚ほ一年や半年はかかる。然るに組立は注文してから二箇月半も經ぬ中にちゃんと出來上がるのだから重寶である。

私が鵠沼に組立家屋を造つたと聞いて、東京の郊外に住んでゐる人達から、色々な問合せがあつたり、注文をしてやつてほしいなどといふ申込があるが、誰か専門家でこの仲介をやつて下さる方があれば、^{ただ}常に文明的なものを持ち込むといふ事許りで無しに、問題の住宅難も幾分緩和されはしないかと思つてゐる。

元來が日本の住宅なるものは自分の宅でありながら、主人自からさへ氣兼ねをして住んでゐねばならぬやうに出來て居る。唐紙が破れては不可ぬ、障紙に穴が開いてはならぬといふやうな上に、水一滴落しても疊に汚點がつくのだから、主人は先ず良いとしても、家族の者などは家が立派なれば立派な程氣苦勞を爲て其日を送らねばならぬのである。

斯の點から行くと此組立家屋は安全であり自由なもので些かも疊を汚すとか、障子を破るとかいふ心配なく、活潑に出入し得るのである。目下私の子供達は、海水浴を爲た儘の砂だらけの足でどんどん上つたり下つたりしてゐるが、その掃除などもざあざあとして掃いて置けば可いといふ位なもので、頗る子供を育てる上から云つても理想的なものであると思ふ。』

◆ 電柱買いから始まった電灯敷設

当時鵠沼別荘地では別荘番を置く事が義務付けられていたので留守居の者の小屋が建てられたようである。また出来上がった家屋に電灯を引く事になったが、電気をつけて貰うには自前の電柱を何本か調達して来て、初めて電線が敷設をして貰えたそうで、当時（大正9年）学生だった父の鵠沼での最初の仕事は、植木屋と藤沢の在までこの電柱を買い出しに行き、運ぶ事だったそうである。

余談だが鵠沼に最初の電灯がついたのは、1909（明治42）年だが、一般家庭は暫くの間はランプ生活をしていた。この電気は江ノ電と共用して居て、川袋の発電所から来ていた。昼間は電車を走らせ、夜は各戸の電灯を賄っていたようだ。この電気は夕方5時に通電して、朝7時に遮断する方式で1937（昭和12）年頃まで続いた。そして7、8年頃にメーターが付く以前は別荘にきて先ず現在鵠沼海岸2丁目の商店街の東よりの高松さんの所にあった電灯会社（昭和12年頃は既に東京電力だった）の営業所に行き、一灯幾らいっとういくと言う事で必要灯数の電球を借り代金を払う事で契約になり電灯がついた。その後電球の明るさによっても値段が変わったので何んしよくこう燭光の電球何個借りて一ヶ月幾らと言う計算の定額ていがく燈料金とメーターによる従量燈料金のどちらかの支払いで電灯がつけて貰えた。
とうりょうきん燈料金とメーターによる従量燈料金のどちらかの支払いで電灯がつけて貰えた。

また井戸は海岸に近かったので簡単に水は出たそうだが、その水質は悪かったので、良い水を得る為に深く掘り下げる必要があった。これが幸いし後の大震災の時に水涸れから免れる事になったと言われている。

◆ 保健衛生にも行き届いた組立家屋の構造

ここでこの組立家屋の構造について改めてまとめて置きたい（7頁図2参照）

組立家屋の用材は全てアメリカ白松即ちセコイヤの一種のモントールパインで、その直径が4～6mもある大木をダマナナイトで割って、木目正しい桁の部材を全部蒸気乾燥をしたものを加工してあるので、乾割裂や収縮の狂いを生ずる憂い

もなく、また虫蝕や腐蝕の度の少ない事も、我が国の材料は遥かに及ばない。

この組立家屋と言うのは、家族の安全と日常生活を本位に工夫と設備とを施してある。つまり耐震、防寒、防湿、防虫、防蝕、盗難の防備、それから採光や通風というやうな、保健衛生上の構造設備を完全なものとし、なお実用と趣味の上にも深く考慮して、住宅としての目的に充分叶う様に工夫されている。

一つの大規模の工場で特殊な構造法と設計図面に基づいて、機械で長さ及び大きさが、全部一定した挽角、鉋削（面削、面取り、組み溝、飾り等）をして、角材、柱、床板、内外の壁板（断熱、防湿パネル）、天井板、窓枠、ドア等を全て製作している。そして設計構造図解に沿った、一戸分の部材一式、何一つ不足の品がないように、窓ガラス及び戸（ガラス共）屋根材料、ブロンズ製の建築金具（ドアノブ、蝶番、カギ、カーテンレール等々）取り付けボルト、締め具、クギ、金槌、防水建築シート、電灯等（但し、セメント石材、風呂桶は別、また塗料は防腐剤のクレオソートは付いているが、ペンキは色の問題からオプショ^ンく祖父はオーダーしてなかったようだ>で3回塗る分と刷毛がセットになっていた）が会社で揃えられ、設計構造図解、手引書（マニュアル）と共に一棟分が1台のコンテナに詰められ送られて来る訳である。ところがこのコンテナ（三棟分）を横浜税関ですっかり開封してしまったので、收拾が付かなく成ってしまった。その上に設計構造図解、手引書（マニュアル）の解説が当時儘ならなかったもので、当時の監督技師、大工達は苦勞をしたわけである。

基礎はコンクリートのブロック（ $W82.5 \times 20 \times 20\text{cm}$ ）で3段重ねて4面を囲いその上に約 15cm （6^サ）の角材で土台を約 90cm （3^サ）間で組み、土台受及び大引き受の束下に約 30cm^3 （1^サ³）位のコンクリートのブロックが置いてある。（これらブロックの調達がアメリカか日本かは不明）

床は二重で、約 2.5 に 10cm （1^サ⁴）の實^{さね}矧^{つぎ}の柱目の板を建物の隅から斜めに全体に張り、その上にフェルト、防水建築シートを敷く。上床は建物に平行して、やはり約 2.5 に 10cm （1^サ⁴）の實^{さね}矧^{つぎ}の総て節無し柱目の板を張り詰めてある。構造は土台、柱、地廻等主要部分はボルト締めでその他はクギ付け。小屋組は垂木^{たまき}そのものが合掌になっていて約 60cm 間に渡し、野地（下張り）は約 $2.5 \times 10\text{cm}$ の實^{さね}矧^{つぎ}の小割板を張り、その上にフェルトと防水建築シートが敷かれ、その上を米松のシングル葺であったようだが震災後の昭和元年に海岸の砂晒しのため、トタン屋根に葺き替えた。

外廻壁板は内外共に約 2.5 に 8cm （1^サ³）の實^{さね}矧^{つぎ}の椽^{たるこいた}小板の二重張りの間に

毛、フェルト、防水建築シートを挿み、空隙を作って締合わせた幅約90cm×高さ約270 cm（1×3 丁）のパネルを約90cm（1 丁）間に内外の間柱と共にボルトにて締め付けて行き、適宜に同じ幅（1 丁）の窓枠（窓はダブル・ハングウインドウ＜二枚が個々にスライドする、上げ下げ窓＞でガラスもはめ込まれている）、出入り口のドア枠を組み込んで行く。これは恰も一つの箱の様な具合に成るので、大変丈夫なわけだ。内部の間仕切りは約 2.5に 8cm（1×3 丁）及び天井板は約 2.5に 10 cm（1×4 丁）のやはり實矧^{さねつぎ}の玉椽^{たまたるき}、合挾板で飾りがついている。ベランダ・ポーチの天井は化粧裏、そして練物の柱型及び手摺がある。以上がこの組立家屋の構造だが当時としては床下が大変高くこれにより、腐蝕されることなく長期に渡り使用出来たのだと思われる。ポーチの上がり口、裏口には三段の階段が付いていて、この板組もセットされていたそうである。

◆ 大地震にも耐えて、僅かにずれただけ

こうして、建った鵜沼の組立家屋は家族の避暑に、祖父の友人の行楽、会社の若い衆の教育訓練所として使われてきた。

1923（大正12）年の夏が終り、家族が東京に引き揚げた直後の9月1日午前11時58分のマグニチュード7.9の、あの関東大震災が発生した。この時はわが家は無人で、留守小屋に植木屋のおじいさんが居ただけだったらしい。しかし幸いにもこの組立家屋は倒壊を免れ、留守小屋を含め建っていたそうである。報告によると基礎から上台が20cm程南にずれただけだったという。そして津波も砂山と地震による隆起で庭先の旧道の所で止まったそうで、殆ど被害がなかった様である。

この時家族で一番最初に鵜沼に辿り着いたのは父であった。父は山梨の北巨摩郡円野村（現韮崎市円野町）で地震に遭い、急いで東京に向かったものの、八王子で汽車が止りそこから歩いて東京新宿の柏木まで辿り着いた。そこで従姉妹二人が鎌倉の別荘で音信不通とわり急遽芝浦まで行き、軍艦に乗せて貰い横須賀に行った。そこから徒歩で鎌倉に入り倒壊した別荘から避難して居た従姉妹の無事を確認、東京へ電報を打った後、海岸を歩いて鵜沼に来た。途中、数日を経っていたにも拘らず多数の溺死者の遺体が放置のままだったそうである。鵜沼に着くと家には四所帯が避難をしていた。計らずも、この組立家屋の堅牢、安全性が実証されたわけである。

その後、10年ほど震災前と同じ状態で別荘として使用してきたが、この間上

地の隆起から、砂の飛び、寄せが激しくなり庭先の県道も砂に埋もれる羽目になり、境界の確保から玉石の垣を巡らせることになった。この時既に藤沢町（当時）では道幅の拡張を計るべく境界より一尺後退させて築造するように指導がされていた様だ。そんな折り父は古くからこの地にいる肉屋の若旦那（^{とりこ}会員の有田裕一氏のお父上）とうまがあい誘われるままに釣りの虜になり、また母も子供の時からよく鵜沼に来ていたので四番目の子（つまり私）が生まれるのに当たり、手狭な千代田区元園町（現麴町二丁目）の家より空気も良く、庭の広い鵜沼をと、東京への通勤は大変であったようだが、昭和10年に急遽、納戸、六畳間、浴室、便所を増築、引っ越して来た。以来、鵜沼の定住家族の一員になり、私はここで生まれ育った。その後手狭のせいで三度増改築をしたものの平成2年4月まで使用していた（今は空き家だが現存している）。

水着のまま海まで裸足で行けるこの家は、別荘時代から、夏は客で賑わっていた。海辺にいる人達に食事の支度ができたの、風呂が沸いたの、帰る時間だのと合図を送る為に、父は高いマストを立て色々の旗を作りその都度揚げさせていた。

そんな素晴らしい環境ではあったが、一風吹けば家中砂だらけになるは、庭の草木は塩枯れしてしまうはで、まだ育ちきれないクロ松は始終追い植え換えをなくてはならなかった。その後、湘南遊歩道路が開通して植樹をすることを条件に旧道との間の土地が払い下げられ、一斉にクロ松が植えられたので、状況はだいぶ改善されたが、戦時の終盤、戦後は食料難から食料増産に庭先は一役買う事になり、クロ松は薪になり、麦や薩摩芋の畑になった。組立家屋は先に述べたように暖房効果が良かったので、定住以来、暖房は石炭ストーブ一台で賄えた。そして石炭が無くなり亜炭になり、薪ストーブにと変わった。そして長年の使用はフローリングの保護剤のワックスなど手に入らない時代であったので、さすがの米松の床も、乾燥でささくれてしまいリノリュームを被せる羽目に成った。

戦後次兄の設計で間口一間で8畳のキッチンを増設の折は予定の場所にある窓を脇にずらして工事を行うことになったが、これ等はボルト隠しの蒲鉾状の飾り板をはずし、ボルトを外し窓枠やパネルを締め付けて居る間柱を外せば、簡単に窓やパネルの移動ができ、所定の位置に増設の間口が開け、増設の段取りは完了した。考えるに1ヤード幅のパネルを基準にした思想による構造は、内外の模様替えを容易にしており、現在行われている合板を駆使したパネル工法に引けを取らないものが80年前にして完成されていたアメリカ製組立家屋の技術水準の高さに敬服しているのは、手前味噌だろうか？ ただこの便利で快適で健康的な洋風生活で育った者として、正座が大の苦手であることを除いて。 （完）

座談会「鵠沼むかし語り」

——^{ほんそん}本村地域に残された生活と慣習

1999年6月29日

場所 鵠沼神明 萬福寺

出席者（敬称略、カッコ内は年齢と在住の鵠沼旧集落名）

荒木良正（84、宮ノ前、萬福寺住職）、荒木和枝（78、住職夫人）、
横田松良（78、清水）、宮崎誠一（73、^{がむろ}上村）、関根博（67、引地）、
関根達雄（71、宮ノ前）、渡辺初江（76、宮ノ前）、鈴木喜代子（77、
上村）、秋保琴子（70、上村）、榎葉昭市（67、原、「鵠沼を語る会」副
会長）、小林政夫（「鵠沼を語る会」協力会員・藤沢市文化財保護委員）、川上
恵久（「鵠沼を語る会」会長）、司会「鵠沼を語る会」

本日はお集まりくださりましてありがとうございました。

鵠沼といいますと、ややもすれば南部の海岸地域の歴史などが中心に語られがちでして、鵠沼発祥の地といいますか、いわゆる本村とよばれる地域のことを知る機会がどうしても少なくなります。本村にかつてあった、あるいはいまなお残されている慣習、習俗といったことを、今のうちに記録しておかないと、後の人に伝えることができなくなるといったものも数多くあると思っております。

そこで鵠沼神明の萬福寺ご住職荒木良正さんをお願いいたしまして、現に本村で生活され、昔の習俗にもおもしろい方々にお集まりいただきました。荒木ご住職は私どもの『鵠沼を語る会』の会員でもいらっしゃいますが、このように多くの本村の方々にご参加いただきまして、たいへん喜んでおります。『鵠沼を語る会』の会員の中には、10年ほど前、藤沢市が行った地名調査に参加したものがおりますが、その時、本村の中にもいくつかの集落があり、それぞれに「組」^{こうじゅう}「講中」など昔からの伝統的なものがさまざまな形で守り、残されているのを知って驚いたといいます。そうしたことについてお話しいたきたいと存じます。

（司会者のあいさつから）

1、「組」について ― 親戚より役立つ互助組織

―― まず「組」についてお聞かせ願えませんか。

宮崎 「組」そのものは元和（17世紀前半、後水尾天皇の時代）のころ、徳川が江戸にきた頃から組織され始めました。まあそのころはそんなに重要視されていなかったようですが寛永10年頃（17世紀中期）から「五人組」を作りなさいということになってきました。そして関東一円から全国へと広がっていきました。この「五人組」の御法度は十三ヶ条くらいあります。例えば素浪人を泊めてはいけないとか、組内で働けないものがいれば届け出をしなさいとか細かく定められていたようです。上村でも当時十軒くらい組内があつて、上組、下組と分かれていました。これは全部屋号で書かれています。上組、中組そして下組というのが新しくできています。これは分家筋のことです。ですから本家と分家が同じ組に入るといふことはありませんでした。ですから「どどここの分かれが下組に入った」といふようなことを言われたそうです。

榎葉 私たち原の方は、まあ時代が浅いのかもしれませんが、通称組という toward 三軒両隣の6軒くらいが組でまとまっている。その中にいわゆる分家も含まれていたのではないのじゃないかと思ひます。

宮崎 そのへんはそうじゃない人でも五人組の中に入れたでしょうが、場所によつては「本百姓」「水呑み百姓」これを分けて組を作らせていたのです。どうもこのへんはそういうことはなかつたようです。

―― 「本百姓」「水呑み百姓」といふのは自作と小作ということですか。

宮崎 それに近いものと思ひれます。

住職夫人 都会では向こう三軒両隣といふのは相互扶助でまた監視し合つていたわけだ。そのかわり一人誰かが落伍しそふたらその分はみんなで助け合ふといふことで、犯罪者も出さない。

宮崎 今では葬式とか結婚式とか災害とか、そういう時には組はこぞつてお手伝いする。昔から百姓でもそうなんです、どつち手不足ならその5人が助け合つて年貢を納めなさいといふことでした。

―― 今でも五人組の名残りはあるわけですね。

住職夫人 今でも名残りはあります。親類より組内の方が相互扶助としては役立つなどと言ひれます。

宮崎 いわば連帯保証ですからね。

—— 逆に新しく来られた方などは入りにくいわけですね。

横田 昔はそうだったけれど、今はそんなことはないね。むしろ「入ってくれ」というくらいだから。「仲間に入ってください」と言わないと物事が納まらないからね。

—— そうすると現在組が使われているというのは大体冠婚葬祭、それだけで組のつながりがあるのですか。

住職夫人 そうですね。

—— 組のほかに庚申講とか地神講などの講というのがありますが、これは組とは関係なく存在しているのですか。

小林 そうです。組というのは制度ですが講は自主的なものです。

—— 組というのが戦争中の隣組になるのですね。最初に自己紹介をしていただくべきでしたが、ここでそれを兼ねて部落の組の実態などをお話ください。

横田 清水では現在9組あります。そのうち農家のほうは6組くらいで、1組6軒から多いところで10軒くらい、これは昔のままの付き合いです。

宮崎 上村では10軒くらいしか古い家はないんです。大体2組に別れていて、全部屋号で呼ばれていました。今では分家筋が入っていますから3組あると思います。

関根（達） 引地の関根と申しますが、実家は今話された宮崎さんと同じ上村の同じ組です。引地の方の組のことはちょっとわかりかねます。

関根（博） 宮ノ前は10組くらいでした。一組は5～6軒です。

渡辺 宮ノ前の組は冠婚葬祭のときに働いております。あちこちへ出て行く方もあってだんだん少なくなっています。

鈴木 上村の組の様子は宮崎さんのいわれた通りです。

秋保 上村の宮崎さんの隣です。

2、徳川家旗本の知行地だった鵠沼

—— ここでご住職のお話を伺うことにしたいと思います。

荒木住職 まず鵠沼の名前ですが、本来「くぐひぬま」と言ったそうです。くぐいというのは白い水鳥、スワンといいますがあれに似たようなかなり大きな鳥の

ようです。「くぐひぬま」というと言にくいものですからいつのまにか鵜沼となってしまうらしいです。『新編相模国風土記稿』などには鵜沼村と漢字で書いて「久々比奴末牟良」と万葉仮名で読みが書いてあります。

私の祖父が俳句をやっている、ここに大勢人を集めてやっておりましたが、その集まりを「くぐひぬま連」などと称しておりました。

奈良時代には鵜沼という地名がまだ無かったようで、「土甘」と書いて「とがみ郷」といっていたようです。そのころの郷は村のようなものですが50軒の家を集めて郷といいました。農家が50軒かたまっているところを郷と名づけました。今の村というのは道だとか山とかそういうものを境にして作られておりますが、そのころは家の数で作ったものなのです。

平安時代になって鵜沼「くぐひぬま郷」というのが出てきたようです。ここあたりは当時「大庭の庄」と言っていましたが、これは鎌倉権五郎景政の領地だったのです。鎌倉権五郎はこの地を管理するだけで、伊勢神宮に寄進してしまいました。天養年間に源義朝がこの地に入って非常に乱暴をしたことが『天養記』という伊勢神宮の記録に詳しく書いてあります。

そのころ鵜沼の南の方は「砥上が原」と呼ばれていて人が住んでいたところは鎌倉時代にはせいぜい^{かみだ}荻田くらいまでだったらしく、荻田のことを江戸時代まで「南」と呼んでいまして、^{なかつめし}仲東、^{おひめし}大東が東の限界で両方あわせて昔は「東」と呼んでいました。

南の「砥上が原」には京都から鎌倉へ通じる道路が走っていて、西行法師や鴨長明などの歌にその名が残っています。

小田原に北条氏があったころは鵜沼は岩本太郎左衛門という人の領地になっていまして、徳川時代になりますと徳川家康が関東全部を領地にしてしまいますが、鵜沼は大橋重保という五百石ほどの旗本の知行地となっていました。大橋重保という人は字が非常に達者で祐筆といって、偉い人のために手紙などの字を書いて偉い人は署名したり判子だけを押し、その祐筆になりました。今で言えば秘書のような役を務めたわけです。重保が亡くなった後その子重政は空乗寺に重保を葬りました。今もお墓がございます。石上の土地9石ほどは空乗寺の寺領になっていましたが、これは大橋氏の願いによって幕府から授けられて御朱印地というものになっておりました。

その後この大橋家は鵜沼と縁がなくなりまして、その後入ってきたのは布施家

という旗本でありました。その頃布施家から私の寺（荒木家）に嫁に来た人がありまして、「寛政重修諸家譜」という系図の本にちゃんと書いてありました。布施重次の娘が高座郡萬福寺某に嫁すとありました。

その頃鵜沼の取れ高といいますが、米として取れるのは約500石でして、その後新田などができて幕末頃600石くらいになっていました。この600石というのはそこを治める領主が全部取れるわけではありません。600石ほど米が取れると年貢として領主に納めるのはせいぜい半分、あと半分は農民が自分のものにするわけです。例えば前田家は100万石の大名などといいますが100万石入るわけではありません。せいぜい50万石あとは農民が自分のものにして半分大名に納めたわけです。

やがて明治の時代を迎えていくわけでございます。簡単に言いますとこんな移り変わりになっています。

3、新田のこと —— うまくいかなかった田圃化

—— 新田についてですが、それまでの田圃は「上の耕地」と呼ばれる引地の田圃がひとつございましたね、それから奥田の田圃、それから堀川田と川袋と、大きなのは四つありましたね、新田というのはどれのことをいうのですか。

荒木住職 大体新田というのは三つあったといわれます。堀川新田、下の沢、それと今の新田というところ、あそこは田ではありませんが、その三つということです。

—— 畑なのに「新田」というのでしょうか。

榎葉 あの新田には堀を作って水を引き田圃にする予定だったのですが、堀が引けなかったのです。

荒木住職 引地川から堀を引いたのだけれど地形の関係で逆に流れるようになってしまったそうです。その堀の工事は偉い按摩さんがやってくれたと伝えられています。杉山検校ではなかったのでしょうか。

小林 ここには江ノ島道の脇道がありますから検校についてのそういう伝説があってもおかしくはありませんが、あの人はその公共事業はほとんどやってないと思います。自分の信仰を広めたのと、目の見えない人のために学校を開いて針灸、按摩というものを全部教えて生活が成り立つようにしたことは大変大きな

ことをやりましたが、公共事業はどうでしょうか。

榛葉 新田というのは昔は桃畑が多かったように、砂地でしたので水を引いて田圃にしようと思ったのでしょうか結局うまくいかなかったのでしょうか。

荒木住職 新田とか堀川^{なんや}の納屋とかの人たちは鵜沼に代々すんでいる人とは違います。新田は関野だとか平本、堀川は神原や山崎だから鵜沼本村にはなかった名前です。

川上 新田の人が堀川に行ってお宮を作っています。

荒木住職 新田の平本さんや八木さんですね。杉浦さんなどもそうです。

川上 住職さんの話で荻田がいちばん南だったとありましたが、堀川、原の方に人が住み出すのはいつ頃からですか。

荒木住職 せいぜい戦国時代くらいでしょう。

川上 海岸の近くを西行やら鴨長明が通ったということですが、そのころはあそこらに人は住んでいなかったのでしょうか。

荒木住職 鎌倉時代頃まではいなかったようですね。原野というか野っ原ですね。

川上 戦国時代には人が住んでいたのでしょうか。

荒木住職 その頃にはいたんじゃないですか。

川上 そうすると西行たちは原野を通ったということですね。

榛葉 いま南という話がありましたが、荻田の斎藤家、大斎藤^{おおさいとう}ですね、あちらを南と言っていましたから鵜沼の一番南^{なぐさみなみ}だったのでしょうか。原や仲東は後から開けたのでしょうか。

荒木住職 仲東^{おほむがし}は前から開けていたのではないのでしょうか。大東と合わせて東とっていましたから。あそこが一番東ということでしょう、新田、石上がなくてね。辻堂などでも東町、西町、南町、北町と方角によって名前がつけてありますから、そういう訳で荻田のことを南、仲東、大東をいっしょにして東と言っていたようです。

榛葉 原や堀川は番外ですね。堀川の南に納屋というところがありました。鵜沼の小字のことはこれで大体わかりました。

住職夫人 昔は当寺の檀家でしたが、小林、林という名字の人は鵜沼では布施家に付いてきた人が土着して農家になったそうです。布施家の親がこの寺に嫁した娘に会いに来るときは、蔵屋敷と今でも呼ばれております小林さんという家に一度来て「これから萬福寺に行く」という使いがあつて、それからややしばらくし

て親が、まあ旗本ですから、お供を連れてきたということを聞いています。

今では小林という家はほとんどなく、左衛門、八郎衛門、清右衛門、この三軒が宮ノ前で私どもの檀家として残っています。

宮ノ前では渡邊さん、関根さんと小林さん、林という姓を名乗っている人は布施家と関係あるそうです。小林というのは宮ノ前の中心に屋敷を持っていました。

荒木住職 鵠沼で一番多いのは関根なんです。大体埼玉の方から移ってきたらしいのです。

川上 関根さんというのは聞いてみると全部が一緒の系列ではないみたいですね。

荒木住職 いく通りもあるようです。家紋なども違います。

住職夫人 上村は主として宮崎、小菅、小菅の方は引地のほうから出たと聞いています。

荒木住職 上村は昔「三軒宿」と言っていまして、三軒きりしか家がなかったのです。徳川時代の始めの頃は宮崎、小菅、関根の三軒で、今でもその本家というのはちゃんとわかっています。関根の本家は「籠屋」という屋号で関根隆政さん、宮崎の本家は権左衛門という屋号で宮崎章さん、小菅の本家は花沢町のほうへ越してしましまして、道剛さんです。

榛葉 今のお話で鵠沼では同じ組の中の家を屋号で呼んでいたということですが、その屋号を鵠沼にお住まいだった有賀密夫さんという方が17、8年前に収集して発表されています。その中で鵠沼の農家にナンバーを付けて地図上に整理されていますが、一番というのが源右衛門さん、これは「新屋^{あらや}」という屋号になっている宮崎さんですね。

宮崎 そうですね。一番最初に番地というものができたときの1番地というのがうちなんです。

榛葉 そうしますと、これはナンバーではなく番地なんですね。

荒木住職 今は畑でも何でも番地が入りますが、明治の初めには家だけ付けていたのです。私のところは20番地でした。

4、現存する「講」—— 庚申講、稻荷講、地神様

—— それでは講のことをお聞きしたいと思います。講といっても何講と何講というものがあるのか、そして現在続いているのは何講があるのかというところ

から伺います。

渡辺 宮ノ前ではもうここしばらくないので、止めてしまったのですが、一日講、十五日講と二十八日講というのがあったのです。

——— これは月に三回集まるといことですか。

渡辺 宮ノ前では人数が多かったものですから分かれていたのです。一日の方は一日、十五日は十五日、二十八日講は二十八日とそれぞれ別々です。それでお念仏をやったんです。

——— 集まる場所はどういうところですか。

渡辺 各廻り番で、その家がごちそうを出します。そして数珠を回して鐘をたいて、お念仏をしました。

——— ごちそうはどういうものでしたか。

渡辺 ごちそうは五目すしとかお煮しめとか、天ぷらとかそういうものでした。

——— 集会所とかではなくて家でやるのですか。

渡辺 家でやるのです。それが今若い人になってきましたので、大儀になってきたから5、6年前からやらなくなりました。

関根（達） あと庚申様、地神様。庚申様は猿の掛け軸（いわゆる三猿。見ざる、聞かざる、言わざる）がありました。

——— それは一日講などとは違うものですね。

渡辺 違います。庚申様、地神様は男の人で講中が別です。

——— 秋葉様というのは、...

渡辺 それはまた違いますが、このへん（宮の前）ではあまりありませんでした。

——— そうすると講は宮の前ではその三つくらいですか。

渡辺 そうですね。庚申様、地神様あとはお念仏、お念仏は三ヶ所に別れておったのです。

——— 庚申講、地神講などは今は続いているのですか。

渡辺 もうみなやめて、お掛け軸などは市の文化財保護課へ納めてしまいました。念仏講のお数珠と鐘はありますが、木魚はさてどこに納めたものか、お寺さんかもしれません。

——— 宮ノ前のことは伺いましたが、その他の地区でもなくなってしまいましたか。

宮崎 上村では庚申講はあります。これは始め講、終わり講、年二回ですね。年

の始めの庚申の日、年の終わりの庚申の日です。これは最近で以前は60日毎でした。また地神講も今でも続いています。

横田 清水は庚申講は「かのえさる（庚申）」の月にやります。「正月のかのえさるは死にたたる」といって2月にやるんです。そして4月、6月、8月、10月、12月と年6回やるんです。一ヶ月おき、庚申月にやるのです。昔は冷蔵庫なんかなかったでしょう、それで暑いときなどは一ヶ月前に庚申講を勤めちゃうの。そういうときは「何月の分ですよ」とあらかじめ触れておきます。

今は公民館でやっているのですが、当時は一軒ずつ廻ってやりました。年に6回やるからね、12軒仲間なんだけど、かのえさるの日は2ヶ月たたないと回ってこないの、だからなかなか回ってこなかったんです。

そして、かのえさるの日は「12時前に寝ちやいけない」というの。それでそばを食べて夜中まで起きているんだけど、昔は博打をやったものでした。それが楽しみでやっているのかと思ったものです。いまはやらないけどね。

今公民館ではざるそばを取るの、それで酒一升と決まってんの。それが終わると長話もしないで9時には解散しちまいますよ。

それと稲荷講というのがあります。

渡辺 稲荷講は清水にもあります。

横田 庚申講は今言ったように一組12軒ですが稲荷講は38軒くらいあります。一つの稲荷さんをやってるんだけど、昔は7日、8日にやっていました。ここでも博打ができるんだよ。

—— 何月の7日、8日ですか。

横田 2月です。今は勤め人が大勢になったんで、日曜にやってます。2月の初巳が過ぎてからの日曜ということになっています。

—— 7日、8日というのは泊り込んでやるんですか。

横田 いいえ、二日続けてということです。7日というのは夕飯の稲荷講なの。それで夕飯がすんでから好きな人は博打をやってるんだね。そしてまた次の日も夕飯を食べに来るんです。お稲荷さんの供養ということだね。

—— 稲荷講は38軒、庚申講は12軒というと両方入っている家もありますか。

横田 庚申講は農家だけ、抜けちゃった人があるから今は12軒です。農家の人はみな両方入っていますよ。

地神様というのはね「地をいじくっちゃいけない」という地の神様だよ。社日の日にこれもやっぱりおそばを食べました。これを清水では二つに分かれてやっていた。

宮崎 上村では10軒で続いています。

——— 社日というのはなんですか。

小林 大体お彼岸前後です。

*社日 社は土地の神の意、暦中の一。春分・秋分に最も近い戊（つちのえ）の日。春は成育を祈り、秋は収穫のお礼参りをする。春のを春社、秋のを秋社という。

——— その日は農作業をしてはいけないのですか。

宮崎 できるだけね。鍬を置いて、この日に地神講をします。これも掛け軸をかけますね。

小林 その掛け軸はどこからですか。

宮崎 俣野です

小林 俣野の神礼寺（今は廃寺、現在の御嶽神社の場所にあったと思われる）でしたら藤沢の他の地区と同じ地神様です。

*西俣野の御嶽神社に地神の掛け軸の版木があった。（西俣野在住渋谷良之氏談）

関根（達） 私が上村にいた頃は地神さんは晩飯が出るんです。それで宿でやるんですが庚申様は長くやるので、晩飯ではなくて上村では夜食なんです。

宮崎 地神様は順番に宿がありまして年二回なんですが、宿の人に一軒が3千円お賽銭をあげるんです。それで晩飯を食べる、まあ飲み食いも入りますが。

渡辺 上村でも地神様はあずき飯ですか。

宮崎 昔はね。今はお弁当をとっています。3千円払っているからね...

——— そばを食べたのは。

横田 あれは庚申様だね。

宮崎 上村では庚申様ですが、始め終わりというのがありましたが、これは地神さんが先なんです。春の地神様の後が始めの庚申、秋の地神様の後が終わりの庚申ということになっていました。

横田 庚申様のときは台風がよくからんだものです。

宮崎 稻荷講は上村では町内全部です。費用も町内会でやります。

——— 何かほかの講というのはありませんか。秋葉講はどうですか。

横田 清水にはあるなあ、秋葉講は。

—— いまだに清水では可睡齋（静岡県袋井市）までいらっしゃっているんですか。

横田 行きます。私は去年は秋葉神社（静岡県春野町）、可睡齋の先に秋葉神社というのがあるんです。そこへ行ってきました。たまたま秋葉神社の宮司がこの皇大神宮へ来たことがあるらしいんです。私も署名してきたので「ああ鵠沼ですか」とわかつちやったんです。袋井で降りて上へあがっていったんだけど。

渡辺 皇大神宮に秋葉神社というのが祭ってあります。

榛葉 いわゆる秋葉神社の御札は本来「秋葉三尺坊」の御札なんですが可睡齋で発行しているんです。鵠沼に講の頭というのですか、その人が蒔田におられて、そのかたが長いこと可睡齋から御札を取ってこられて、それが講元で各部落が御札をもらって、お賽銭をあげていたんです。

—— 可睡齋というのは秋葉神社の中のお社なんですか。

横田 違います。昔は神社仏閣はいっしょだったんです。秋葉神社が遠いので可睡齋で合同でやっていたんだと思います。ところが神社仏閣が別個になったというんで、秋葉神社は向こうへ移った、だから建物もまだ新しいですよ。袋井のとは口が可睡齋で近いのでどうしてもそっちへ行ってしまうのです。可睡齋はお寺で山伏の姿でね、修験道ですね。あそこは「火伏せ」の神様、火が入らないようにという神様なんです。

小林 出羽三山の講はなかったですか、原に碑が立ってますよね出羽三山の。

荒木住職 今はもうないでしょう。

榛葉 普門寺さんが先達で出羽三山へお参りをしていたらしいです。鵠沼に残っているのはあそこの碑だけですわね。

—— 秋葉講というのは御札を貼るということだけで、特別な行事はないのですか。

榛葉 御札は各部落の講へ来ますから、その御札を貰いに一晚の講で集まってごちそうして、庚申講や地神講と同じようにやっています。

5、盛んだったバクチ —— 「ちょぼいち」 「かんのうじ」

—— そういったところでの博打というのはどんなものだったんですか。

横田　さいころ賭博だね。新聞紙にさいころの目を書くんですよ、6個ね。さいころは一個でつぼを伏せるの。それでその目が例えば5なら5と思ったら、そこに張るわけです。それで6ヶ所張っちゃうとつぼを伏せたやつの権利がなくなっちゃうんで、5ヶ所きりしか張っちゃいけない、一場所はあけるんです。大勢で自分の好きな場所に張るわけですよ。それでつぼを開けますが一ト目あいた場所に出れば、つぼを伏せた人の権利ということで総取りだよなあ。

まあそういういたずらるのが楽しいんだよ。

榛葉　そういう博打はいつごろから地元でやってたのでしょうかね。鵠沼の海岸が開発されたとき、それに使われた人夫さんがお金をもらい、その日の夕方博打で取られて何も持たずに帰ったというような話があります。講のほうは古くからあったんで、講の楽しみとして博打があったでしょうから、それが鵠沼海岸が開発されるときにどなたかが行って仲間に入って、そこでまた盛んになったんじゃないかな、という気がするんです。

渡辺　それは本村の方が先でしょうね。昔から博打、博打と言っていましたよ。

横田　今日は何々の集会だなんていうと、始まっちゃうんだよ。俺のとこなんかでもよくやっていたね。

関根（達）　上村ってところは花札です。さいころはやらなかったけど花札は稲荷講の日に徹夜でね。

渡辺　みんな稲荷講の日にやったらしいね。

横田　花札っていうのは三人きりしかできないんで、あとみんな見てるだけでつまんねえんだよ。花札は三人だけけど「ちょぼいち」（さきほど説明のあったさいころでの遊び）っていうのは何人でもできるんだよ。「ちょぼいち」というのはさいころ一個、「丁半」というのはさいころ二個、これは2割しか付かないの。「ちょぼいち」のほうは4割付くの、だから3回負けても損はないの。それで胴元になって「空き目」というところにくるとごそつと入る。でもやくざが入っていると割り前取られちゃうんだよ。

細かい話をすると、4ヶ所平等に張ってある場合は伏せた人が金が無くても開けられるの、4割付けるんだから。でも片寄って張ってあると伏せたもんが金が無いと開けられないんだよ。そういう時にやくざがいると、その無いところに3割付けるとか言ってね、自分が張るんだよ。そうすると伏せた人が楽になるもんね。そんなことでずいぶん楽しんだことがあったよ。

集会があるよね、葬式なんかのとき、地面に杵を書いて金をほっぼるんだよ。はみ出たら取られちゃう。そんなこともやっていたね。10人いると始まっちゃう。葬式に出る前だよ。

十文銭があるでしょう。あれの穴は四角ですよ。四隅に字が書いてある、それを二枚合わせて地へ埋けるの。それで「頭どっちだい」とあてっこするの、「かんのうじ（寛の字）」といってね。寛永通宝の「寛」の字っていうわけ。

これは漁師の博打でね、いわしが来るまで時間があるんだよ。沖に鳥がもよおして来んとよう、今にももっとこっちへ来んなあ、と言って待ってるの。待っていると引き子は大勢集まっているでしょう。それで博打ができちゃうんだよ。おもしろんだよこれがまた。頭を探すんだ下の字の、二枚重ねてあって中は四角だからあっちまうんだよ頭はね。これもやっぱり一ヶ所抜け目があって、三ヶ所きり張っちゃいけないの、二割しか付かないんだけどね。時には抜けちゃう人もあるんだよ。戦争までやっていたな。戦争になったら十文銭がなくなっちゃったから。

榎葉 ちょっと補足しますが、清水というところは漁師さんが多く、横田さん自身も漁師の看板を持っておられました。半農半漁で昔からやっていたところですよ。

川上 博打で取られて夜逃げなんかした人はいなかったですか。

横田 そんなにまでやることはないよ、商売で行ってるんだからね。遊び程度だよ。

いわしなんていうのは来る時間があるんだよ。でも早く行って待てないと、きわへ来るのを取れないから。暗いうちから行って準備しているの。

6、年中行事 —— どんど焼き、どうろくじん様、一つ目小僧

—— 次に年中行事についてお聞きしたいと思います。たとえば正月三が日何をするとか、松の内何をするのかという行事がありましたよね。

初詣は皇大神宮へ行かれるのですか。

宮崎 上村は町内行事として行きます。役員さんと一般の参賀者で30人から40人の間くらいですね。一日の朝の10時頃です。

—— 11日に蔵開きがあつて、14日どんど焼きですが、これは今でも各町内でやられていますか。

宮崎 上村はやってますね。

渡辺 宮ノ前もだんご焼きというのは、場所が無くなって燃せなくなってやめてしまいました。

—— 道祖神の脇でやるわけですね。

小林 その時火の中に何か入れますか。

宮崎 入れます、石を。まずお飯屋を作りまして、

小林 お飯屋に道祖神そのものは入れませんね。

宮崎 お飯屋にそれらしきものを入れまして、いつも道祖神の横に飾ってあるんですが、それを入れますね。

小林 正式にいうと道祖神を藁で全部囲んじゃいましてね、そこに火を付けて道祖神ごと焼いちゃうんです。

宮崎 早く出しますけどね。

伝説が各町内によって違うんです。上村なんかでは「いっせいまつせい、どうろくじんさんまるやけだ」と言っではやし立てて喜ぶんですよ、焼けたことを。それがだんご焼きのまず第一の行事です。

その意味ですが「どうろくじんさん」というのは地元の有力な神様なんです。閻魔様が「今年、あいつは悪いやつだよ」とつけたその閻魔帳をね、どうろくじんさんのところに暮れに預けるんです。それで初午が過ぎると取りに来るというわけです。その間に「どうろくじんさん」を焼いちゃおうと。いっさいがっさいまる焼けて帳消しになっちゃう。閻魔様が「あいつは悪い奴だから今年中に天へ持ってちゃおう」そういうような閻魔帳が全部そこで燃えちゃうということで、喜ぶんです。

鈴木 その時に書き初めを燃やすんです。その時に焰が上へ上がるとその人の腕前が上達するといわれたものでした。今でもだんごを餅草で作ります。

関根（達） どんどん焼きで焼いただんごを食べると昔は風邪を引かないといわれました。残りの炭ではなく、松のくすぶった枝を持って帰って、入り口のところに「どろぼうよけ」に飾りました。入り口に立てかけておきます。

渡辺 うちなんかのほうは、その松のかけらで15日のおかゆを炊いたの。15日はあずきのおかゆです。

鈴木 うちのほうはその松はたてかけておきました。

7日は七草、11日はせみ開き、これはおしるこ。「片祝いはするものじゃない」といわれて七草をしたら必ず15日も、これは今でもやっています。その15日

のおかゆをちょっと残してとっておいて、18日の日に食べると毒虫に刺されないなんていって、凍ったようなものを食べたもんです。

関根（達） 海草を入り口に置いとくと泥棒よけになるなどとも言いました。祭りの山車のとき海へ「浜^だ降り」に行ってとってきてそれを門というか、入り口に付けておいて、その海草、ほんだわらが暮れの大掃除のときまでカリカリになるまでおいてありました。

関根（博） 今と違ってブロックとかフェンスなんていうものはなくて植木の生け垣ですから、その植木の枝のところにぽっと掛けておきました。

—— 2月には先ほど出た稲荷講ですね。

小林 ざるをどこかにかけませんか。

渡辺 「一つ目小僧」といって12月8日、かごを家の前に置くのです。

小林 ざるは目が多いから一つ目小僧が驚いてどっかいつちやうという．．．。

渡辺 昔「しよいかご（背負い籠）」というのを使ってたんです。

—— 2月8日に「八日ぞう」というものはこちらでやっていますか。

小林 鵠沼では12月です。藤沢の北の方は2月、大庭から向こうは2月8日です。

川上 それは今でもやっているんですか。

渡辺 10年くらい前まではあったようですが．．．。今はしよいかごもなくなったから。昔松葉のくずを掻くのよね。

小林 北の方では水の中で使う丸い籠「だんござる」を使うんですが、こちらではしよいかごなんですね。

—— 七草のときに菜を刻みながら歌いますよね。あれはどういうものですか。

渡辺 「ななくさなずな、とうどのとりが、わたらぬさきに．．．」これは家々で違っているようですね。

横田 清水のほうではおかゆは食べるけど、そういうふうにはバタバタとはやらないの。門松もやらなくていいくらいだから。

渡辺 門徒はやらないのね。

住職夫人 昔から門徒、真宗のほうでは、そういうことは迷信だからやりません。みなさんがお鏡をお持ちになるので鏡開きはしますが、お正月でも松飾りはいたしません。お正月にしめ飾りなどというものをするとろくなことはない、上村の方では明治になって神棚をいやおうなしに作ったわけです。

横田 神棚があつたって飾らないのです。

住職夫人 村ではお宮さんはそうは大切にしないのです。盆かざりというのも門徒はしません。俗に「門徒は花」などと言います。

荒木住職 「禅掃除、真言料理、門徒花、法華盛り物、浄土自堕落」などといいました。その宗旨の特色と言いますか、そういうものです。

7、皇大神宮の祭り —— 土地を担保に借金で作った山車

—— 夏になりますと8月17日が皇大神宮のお祭りですね。

渡辺 15日が「のぼり立て」。お宮掃除。

—— これは誰が言い出したということでなく昔からそうになっているんですね。

宮崎 そうですが、順番が違いました。8月1日がお宮掃除なんです。今は日曜日になってしまいました。のぼりたては15日です。

—— 皇大神宮は昔から「湯かけ神楽」をやっていたんですか。

宮崎 もう大分前からやってますけど、いつからというのは定かじゃないです。

—— 人形は何年か使うと取り替えるのですか。

宮崎 いたむからねえ。

—— 例えば浦島太郎の人形がなんか別のものに変わってしまう、そういうことはありませんでしたか。

関根(博) 一つはわかっています。^{しゅくわ}宿庭というところ。あれは前は天狗だったけど、今は義経。ほかは皆同じです。

宮崎 上村だって頼朝じゃなかったって話なんだけど。

—— 人形を作る細工師はいるんですか。

宮崎 人形師はいませんので、東京へ持っていかなくやだめです。

—— 今は山車は全部皇大神宮の山車庫に入っていますが、昔は各町内にありましたね、そのころの苦勞話などありましたらお聞かせください。

渡辺 原、堀川の人は大変でしたよね。東海道線を越えてこちらに渡ってね、それに砂利道でしょう。

榛葉 帰りに急いで東海道線のところで山車をひっくり返しちゃったんです。そのひっくり返した山車はどっかほかへ譲っちゃって、新しく作ったのが今の原の持っている山車と聞いています。

——— これは大体いつ頃から始まったんでしょうかね。

宮崎 のぼりが天保、嘉永（1820年～1850年頃）だからね。

横田 のぼりの方が早いんだよ。

宮崎 上村の山車なんかは明治16年ですよ。

——— 作り直したのではなく最初が明治16年ですか。

宮崎 そうそう。車輪の車軸に鉄の棒が入ってるんだけど、それに年号が入っています。

——— その当時から今の形のお祭りになったんですかね。

横田 私が覚えてる当時の上村の山車は新しかったよ、一番きれいだった。

関根（達） 作りがいいんだよ。それに蚊帳に包んでしまってあったんだから。

宮崎 明治16年に作ったというのは山車の下だけです。それで土地を担保に入れまして、昔は7軒ですか、それが払い終わるとまた上ものを作るためにまた借金するという。

——— なんかのきっかけがあって始まったんでしょうかね。

宮崎 よくはわかりませんが、水戸のご老公光圀さんが神道派だったものであの当時から神仏分離という方向になっていましたのでしょう。その後だんだん浸透してきて天保年間にお祭りというものが神様を大事にしよう、豊年万作は神様へというように宗教的なものが変わってきたのではないのでしょうか。

榎葉 一つには東照宮を建てた大工さん、あの頃一番立派な建物なんです、そういうものを建てた大工さんが地方に戻ってきて地方の神社とか山車を作りはじめたともいわれています。

宮崎 鵠沼なんかは山車を作ったのは遅い方じゃないですか。川越とか佐原とかのほうは歴史的には古いんでしょう。

川上 明治の初め頃はこの辺はけっこう裕福だったんですかね。

宮崎 裕福じゃないですよ。

関根（博） 宮ノ前でも山車は全部できあがっていなかったんです。金が払えなかったんでしょう。

宮崎 今あれを作ったらどのくらいかかるか、1億5、6千万かかるっていうんです。村岡であきらめたといえますから。

川上 少ない所帯であれだけのものを作るんだから裕福かと思ったらそうじゃなくて、逆に裕福になりたくて作ったんですかね。

関根（達） 私のおばあさんは明治4年生まれなんです、おばあさんから聞いたのでは、なにしろ山車の無尽で「山車、山車、山車」と大変だったと。うちのおばあさんは婿取りですから、男の兄弟はいなかったみたいです。私が小学校終わったくらいのときの終戦後に山車の話を聞きましたが、何かあると最後には山車の話になる、集落の財産という話をしていました。

でも上村としてみれば今の話のように宮ノ前からずっと進んでいると、上村だけ脱落してはいけないというので、当時上村の10軒ちょっとであれだけのものを作った、たいしたもんですよ。

—— 各町内で張り合って山車を作っていたんですね。

宮崎 上村は人数が少ないですからこっちの方の集落から神社まで引っ張って行けないんですよ。それで宮ノ前の町内の人を手伝いに来たんです。それでも作ったということだから旧町内というのは団結していたんですね。

関根（達） 上村の今の高京園（花屋）のところ、あそこを大辻といたんです。ですから上村の山車小屋は宮崎章さんというお宅のすぐ脇にあったんです。「山車小屋から大辻まで引っ張って行けばあとは宮ノ前が来てくれるよ」ってあそこまで子供心にいっしょうけんめい引っ張っていきました。

関根（博） わずか200メートルくらいだけど、道路条件が今ほどよくないからね。

—— 以前は山車は各町内においてあったんですね。

渡辺 山車小屋というのは各町内にあって、宮ノ前では3回変わったんです。

8、道普請 —— 地区の人々の義務だった道路整備

—— 道路整備ということでは鵠沼では砂利をだいふ敷いたとか、...

小林 それは相模川からこっちは全部です。どこへいっても道路改修といたら農家の人が砂利を持ってきてやったものです。藤沢でも^{茅郷}のほうへ行きますと、金が無いからみんなで荷車を引っ張って相模川に行って砂利を拾ってきて、道へ撒いたということです。

関根（達） いやあ鵠沼の道は悪い。いま言った大辻のところからどんどん引っ張っていくと木へみんなぶつかってしまう。舗装して平らであればぶつからないところまでね。若い衆は山車の屋根に乗って枝をよけるんだけど、下は走って

いるしどこでガッタンがあるかわからない。今の土方哲平さんの家の周りなんて恐くてね。

榎葉 でも鵠沼でも砂利を引いて、相当固くなって農家もリヤカー引くのが楽になったものでした。私の記憶では今の時期に雨が降ると、砂地だから普通は吸い込まれちゃうのが道路ですが、そうじゃなくて上を小川のように流れてそこに小砂利があつて、小砂利で澄んだ川が宮ノ前から家の前を流れて小さな雑魚がまわってきたという記憶があります。途中に堀がありますからそこから流れてきたんでしょう。梅雨のときなんか雨が続くと家の前の道がきれいな小川になってしまったんです。

住職夫人 それから道普請、道路が悪かったでしょう。町内でみんなが総出で「ごしんやく」といって辛い役ということなんでしょうね、

小林 出られない方はいくらかお金を払うというようなことをしていましたか。

住職夫人 「ごしんやくですから」といってお茶菓子を買うとか、それは女手だけの家だとかですね。農家ですから道が悪いと男衆がみんなで町内の道路を守っていたんです。

横田 地区の人が道路をよくしたんです。市へ頼んだりしません。

宮崎 さっきも出ましたが五人組みの御法度、守らなきゃいけない項目の中に自分の地域の道路を整備しなさいというのが入っているんです。それがずっと残っていたんですね。

小林 宮崎さんのところは東海道の掃除には出ましたか、そういう話を聞いてませんか。

宮崎 いや、聞いてませんね。

小林 割り当てがあつて東海道を毎日毎日掃除したので東海道は非常にきれいだったというんです。

宮崎 助郷^{かご}制度なんかでそういうのがあつたかもしれませんね。

***助郷制度** 江戸時代、宿駅常備の伝馬・人足が不足する場合に、指定されて応援の人馬を負担する近隣の郷村。

小林 いや助郷なんかじゃなくて、通っている集落の、両側の集落に割り当てがきまして東海道を何回も何回も掃除したんです。

関根（達） 引地の方はあるいはあつたかもしれませんね。

秋保 車田はあつたと聞いたことがあります。

小林 羽鳥やなんかは残っているんです。引地川を越えますと辻堂の明治地区なんかには記録にも残っています。

秋保 私の知り合いが車田におりまして吉田さん（吉田茂元総理）が「この辺はきれいだ」とおっしゃったと聞きました。

9、石楯尾神社（皇大神宮内）の祭りしやうておと那須与一の弓のこと

—— 石楯尾神社について、お祭りなんかはあるんですか。

宮崎 お祭りは最近始めたんです。5月17日が例祭です。

—— あっちの方が（皇大神宮より）古いという話ですが。

小林 これは相模十三社の中に入っていますが、今は五つの地区で自分のところがその十三社の石楯尾神社だということで．．．。津久井に二つ、大和に一つ、座間に一つそしてここですか。

宮崎 石楯尾神社がどこにあったかというのが不明なんです。だから「俺のところだ、俺のところだ」と言ってるんです。

小林 そうですね、十三社のうち他はねえ、宇都母知神社、寒川神社などはっきりしていますからね。石楯尾だけがはっきりしないんですね。

榎葉 昔、皇大神宮の中に階段が二つあったんです。私はあれは行き帰りの階段だとばかり思っていたのですが、石楯尾方面の階段と皇大神宮の階段と二つあったんですね。

渡辺 なんかあぶなっかしい階段でした。

荒木住職 二つのうち奥に向かう階段が石楯尾神社のじゃないかと言われていました。

—— もう一つ伺いたいんですが、那須与一の弓がどこかのお宅にあると聞いたことがあるんですが、ご覧になったことがありますか。

榎葉 原の浅間さんのところにあるということです。浅間というのは鵜沼に一軒だけしかない名字です。しかも一時神主をやっていたということです。場所は今のすずきやというスーパーの北側ですね。

住職夫人 私が聞いた話では、浅間さんが一番先に神主みたいなことをしていて、高松さんという古い家の方が別当で一番偉い．．．。

荒木住職 高松さんの家は本来お寺なんです。教宝院といって山伏の修験道です。

別当と名乗って神仏混交でした。

榛葉 その那須与一の弓ですが「あります」ということで朝日新聞にも取り上げられたんですが、第三者に見せるとよくないということで、見せてもらったことはありません。家の厨子にあったということです。

—— 原のあたりは昔は開けてなかったんじゃないでしょうか。

榛葉 こちら（本村の中心部）からあそこに移ったんじゃないですか。

荒木住職 岩田さんも「ねぎ徳」（禰宜）といってましたね。

榛葉 神主さんがいなかった頃、その方がお宮（皇大神宮）を守っていたんです。

住職夫人 今の神主さんの先祖は宿庭の人で御嶽講というものの先達をしていました。それで今の修道院のほうに御嶽講の社があり、そこに住んでいたので「お山の先生」と言われていました、宿庭の聲太郎先生（^{しょうたろう}）のことです。私たちが子どもの頃「五百草」といって御嶽山の草を固めたものを十銭かなにかで神主さんが譲ってくれるんです。その子孫が今の神主さん（関根さん）です。

10、年中行事続き —— 「さなだ」行き、雨乞い、虫送り、女の花見

—— 夏の年中行事についてお聞かせください。

関根（達） 上村では田植えが終わると平塚の在の「さなだ」というところに、7月の9日でしたが七夕祭りによく行きました。田圃の中でけっこうにぎやかなお祭りでした。

横田 地名は真土、真田の与一（^{しんど さなだ}）と言っていました。

川上 真田の与一という人は頼朝の身代わりになって殺されたという人ですね。

—— その土地と鵠沼には何か特別な関係があったんでしょうか。

横田 それがよくわかんないけど、真田、真田ってよく行きましたよ。

渡辺 歩いていったんだから。

関根（達） 私たちは平塚まで汽車で行きました。

渡辺 年寄り歩いて行っていました。

榛葉 昔の人に聞くと歩いて行って、寒川の渡りで相模川を渡ったと聞きました。

渡辺 由来はわかりませんが、時期的には田植えが終わって農家の息抜きの時期の楽しみだったのでしょうね。

—— この辺は砂地で雨が降らないと困りますね。

渡辺 昔は雨乞いをやっていましたが、今はありません。3年ほど前に再現をしました。

——— これは雨乞いの竜を作って神明様でお参りをして最後には海に流したんですね。

関根（達） 稲の虫送りというのも昔はあったそうですが、どうやったのかはわかりません。

小林 田の神様「たのかんさあ」というのはこの辺にないですか。

榛葉 このへんではやりませんが、藤沢でどっかありますか。

小林 北の方ではやっていたんですが、もうやってません。

住職夫人 虫送りというのは「虫封じ」といってやっていました。お払いをして田圃を清めたんです。

——— 女の方がいらっしゃいますので伺いたいのですが、「花見」と称する女の子用の行事があると伺ったんですが、この花見は桜ではありませんね。

住職夫人 私が子どもの頃、おばあさんに連れられて辻堂山の方へ桃のお花見に行きました。

小林 今のソニーの近所、あのあたりは全部桃畑だったんです。

榛葉 私も小学校のとき砂山に遊びに行つて弁当を広げたり、傾斜で空転などをして遊んだことがあります。

住職夫人 小学校の頃高砂（辻堂）へ遠足で行きました。

小林 女の人の講というのはなかったんですか、たとえば二十三夜講みたいな。

渡辺 女の人の講は光明講というのと、お念仏、そろばんみたいなものを使うのが光明講です。

11、九網もあつた鵠沼の地引き網

——— 地引きの網のことですが、鵠沼には8じょうだか9じょうあつたと言いますが。

横田 あつたときはね。大正網というのがあつただけど、やめちゃつたんです。うちでやりはじめたのは大正になってからだけどその時にはやってなかったらしいです。

*地引き網の数え方について鵠沼では「1じょう、2じょう」と数えていたそう

です。漢字のあて方については今のところ不明です。ひとあみ、ふたあみ（一網、二網）とも呼んでいたそうです。

榎葉 大正網は大東の森井さんです。

横田 ^{ガッコ}学校網は苅田の内田さん、これは小学校の近くにあったんです。それで鶴小の子供がよく手伝いに行ってたんです。

小林 明治の終わりには8じょうから9じょうあったんです。

川上 今は鶴沼でやっているのは堀川網だけです。

横田 関根さんの新開網、うちは新網っていったの、今一軒はキス網、お魚の鱈ですね、これは日比さん、この人は茅ヶ崎の小和田の出です。これでしばらく続いたんですがキス網は昭和8年頃やめたんです。

—— 地引きの引き子というのはどのへんの農家の人が行ったんですか。

関根（達） 上村からも行った。うちのおばあさんなんかは行ってたからね。

渡辺 宮ノ前からも行きました。

横田 どこの農家がどこの網に行くというのは決まっていたんです。明日浜へ行くというのは朝触れるんです。遠いところは前の晩に「明日漁があるからよろしくお願いします」と触れるんです。うちでは触れるのが20軒以上あったんです。これが毎日の仕事です。浜のないときは家へ来て百姓やるんだよ。

うちは仲買人が辻堂なんで、辻堂へ夕方「明日行くべえ」と、電話も無いからね、昭和10年頃じゃあ、自転車で行くんだよ。すると今のナショナルのところへ行くと山がいっぱいで、カラスが夕方見えるんだよ。カラスがガアガアやっておつかねえんで、それで使いして家に帰ってくるのいやなんだよ。なにしろ「明日浜へ行くんだから行ってこい」ってこれを小学校3年くらいのときにそんな遣いをしたんです。

榎葉 皇大神宮を昔は烏森といいましたがあそこもカラスが少なくなりました。昔辻堂山と言っていた今の辻堂の高山にはそれはたくさんいたものです。

横田 地引きの引き子には日当を払うわけではありません。「行ってくださいよ」と言うでしょう、何しろ魚が入らないと金が入らないでしょう。金が入るとね、その品物がいくらになるかわからないけれど、四分六っていったね、六分を引き子が分けたんだよ。四分が網元に入ったの。でも網元に入った四分から^{はまおとこ}浜男ってというのがいるんです。浜男っていうのは専属に来る人、そういう人には別にやるんです。

——— その浜男はどういう人ですか。

横田 どういう人って、目の効く人だよ。船が5ハイ出るでしょう、今日はいわしが来る日だというと皆目を光らせて見ているんだよ。それでも目の効く人と効かない人がいるんです。魚が出てくるのを「ああ、こらきたわへ」って見つけるのが早い人がいるんだよ。そういう人を頼んでいるんだよ。競争して品物を網へ入れるんだけど、櫓で漕ぐもんだから大変だよ。それでも取れるときはいいけど、取れないこともあるからね。

——— 獲物はほとんどいわしですか。

横田 たつぷりと取れるときはいわしだね。昔は大きなさばもとれたこともありましたが、今のさばは小さいけどね。しっかり取れるとその場所ではけないんです。そうすると舟に積んで茅ヶ崎の南湖の市場へ持っていくの。漕いで持ってくと南湖の市場でも「今日はさば、こっちでもようあがってる」って、こうやられちゃうんだよ。でも持ってって持って帰るわけにいかないから置いてきちゃう。いくらなんないときもあったんです。半日近くかかって持っていくんだものね。5人くらいで漕いでいくんだけど大騒ぎだった。

住職夫人 昔はここらでも、初茸^{はつげ}を探しに行ったり、松露^{しょうろ}を取りに行ったりしました。松露は戦後まで取れました。

——— 最後になりましたが、鵠沼の農家の人が、女衆、女の方も地を這うような生活をして、鵠沼というものを盛り上げてこられた。この萬福寺には内藤千代子さんなどの立派なお墓もあるのですが、それはそれとして鵠沼の歴史は農家のご苦労の歴史でもある、それを知っていただきたいという、昨日私が住職の奥様からお聞きしたお言葉をお伝えして終わりの言葉といたします。

貴重なお話を聞かせてくださいます、本日はどうもありがとうございました。



森 銑 三 氏 の 沼 鵠

松岡 喬（「鵠沼を語る会」会員）



ご自宅の庭にて、森銑三氏

鵠沼の本村以外の地域が主に別荘地として開発され人が住むようになったのは百年ちょっと前のことでした。とはいえ今の鵠沼に純粋な「別荘」として今も使用されている建物は恐らく数えるほどしかありません。いま鵠沼の建物の大多数は住居として使われています。この地に住み始めた理由というのは人それぞれでしょうが、これから述べる森銑三氏の場合はまさに偶然という言葉がぴったりのものでありました。

以下、ちょっと長い引用になりますが、その偶然性をお分かりいただこうと思います。

反町茂雄氏（古書肆「弘文荘」代表）は著書「一古書肆の想い出」（平凡社）の中で次のように書いています。

その頃は（昭和9年頃→筆者注）（森銑三氏は→筆者注）古人の伝記の調査研究に専心されていましたが、範囲は江戸時代、好みは文人・学者・画家等に限定されて居り、その筆が公卿・武家武将、あるいは富豪等、世俗の世界に威勢を張る人に及ぶことは殆どない。態度は真摯・質実。名利を求める心持ちはごく淡い。生活は甚だ簡素、清貧に安んじられていられる様に見えました。

（中略）

お住居は本郷の動坂でしたから、二十年四月の空襲で罹災されたに違いあ

りません。しかし、その後の消息は私には不明でした。

昭和二十二年の秋に、神田から歩いての帰途、本郷三丁目の交差点から、少し東大寄りの路上で、バッタリお逢いしました。「オオ、これは」と、小さく驚きの声をあげられました。気持ちはこちらも同じ。

「どうもスッカリ御無沙汰いたしました」

「イヤ、こちらこそ」

「動坂は焼けたんでございましょう。いまはどちらにお住まいですか」

「家内との縁続きで、板橋の石井鶴三の家に厄介になって居ります」

石井さんは彫刻家また版画家。中里介石の『大菩薩峠』や、吉川英治の『宮本武蔵』の挿絵を描いて、小説と併せて「双絶」などと評判の高かった芸術家です。しかも東京美術学校の彫刻科の教授という、立派な地位のお人。しかし誰もかれも生活の不自由な事は、同じ時分です。森さんは元来瘦身長軀の人ですが、四、五年振りに見る森さんは、やせにやせて、長身はステッキの如く、顔色は青く土色でした。

これが森氏が亡くなるまで35年にわたって勤められた古書肆「弘文荘」の反町茂雄氏との出会い、まさに邂逅ともいうべきシーンです。

こうして反町氏は森氏の住いを探すことになるのですが、そこで思い付かれたのが鶴沼の反町氏の別荘だったのです。戦争・敗戦と続く時局の中で当時はほとんど使われていなかった別荘に森氏ご夫妻は住まわれることになりました。（今の鶴沼小学校の引地川を挟んだ向かい、鶴沼海岸5丁目13番地付近）

そしてその後昭和51年（1976年）に近くの鶴沼海岸2丁目に転居されますが、全くの偶然で住みはじめた鶴沼で後半生を過ごされることとなったのです。

森銑三氏が突然松岡の家にご挨拶に見えたのは、氏が鶴沼に來られて間もなくのことでした。きちっとした背広で帽子を取られて挨拶される氏に私の祖母の初子が応接していたそうです。祖父の静雄はどうに（昭和11年）に亡くなっていましたので、森氏は未亡人の初子を訪ねてみえました。

松岡静雄と森銑三氏が面識があったかということについてはわかりません

が、おそらくなかったのではないかと思います。詳細な記録を残されている森氏ですが、静雄と面談したという記述は見られないようですし、森氏が上京されて上野図書館内文部省図書館講習所に入所された大正14年（1925年）、その年にすでに海軍を退役していた静雄は病を得たこともあって、高座郡藤沢町大字鵜沼字堀川小字納屋（鵜沼海岸7丁目の現在の住居）に引きこもっていました。以来亡くなるまでの10年というもののほとんど他所に出ることがなかったようですから、森氏と知り合う機会はなかったように思われます。

ただ静雄の兄二人（井上通泰と柳田国男）とは面識があったようですので、両名からの話を聞かれたり、静雄の著書を読んでおられたりということは当然あったと思われます。そんなわけで氏が鵜沼に住まわれて静雄のことを思い出されて訪ねて来られたということではないでしょうか。

氏の「回想」の「井上通泰先生のことども」（森銑三著作集第12巻 中央公論社）に静雄死去の報を聞いた井上の様子が書かれています。

その時けたたましく電話のベルが鳴った。それが静雄氏の死去の通知だった。講義をやめて耳を澄ましてゐられた先生は聲を顫わせて、「静雄は死んだか」といふなり、「わっ」と泣いて、机に拳を重ねて置いた上へ額を当てられた。しかし二分して顔を上げられた時には、いつもの平静を取返してゐられた。「けふはこれだけにする」さういって静かに席を立たれた。門人達は一人として口を聞く者もなかった。その時の様子が今に目に浮ぶやうである。

たぐひこし松のいつ本一もとのまづ枯れしだにさびしきものを
先生はついでにかように詠んでおられる。

静雄の二人の兄のうち、森氏は特に井上通泰との交流が深かったようです。もともと慶応2年（1866年）生まれの通泰は森氏より30近く年上で、しかも森氏が識った昭和2年（1927年）ごろの通泰は「山縣有朋、乃木大将の歌の師」と言われたり「歌会始の点者」になるなど歌人としてその名声の絶頂期にあり、森氏は通泰を師と仰いでいたようです。

氏が井上通泰と始めて出会ったのは「昭和2年の晩秋の日曜日」（「過去

を語る」）であり、「南天荘」と号した通泰については多くのことを書き残しています。森氏の見る井上像は「政界の黒幕」「名聞を好む」とされた世間の井上像とは異なり、前掲の「井上通泰先生のことども」が井上の死後すぐに書かれたものということ割り引いても非常に好意的なものです。

先生の眼中にはただ学問があるのみだった。すこしでも世に時めかうとか、物欲を充たさうとかせられたのではなかった。先生の如きは真の学者であつたと思ふ。私は生まれて先生の高風に接することの出来たのを、一生の喜びとしたい。（「回想」「井上通泰先生のことども」）

森氏は大学、学士院などというところと生涯関わりが持てず、学者としての評価が低かった井上にご自身を重ねられていたのかもしれませんが。

森銑三氏夫人の篤子さんにはいろいろお世話になりましたが、そのことは後に触れるとしてそのプロフィールを反町茂雄氏は「一古書肆の思い出」でこう述べています。

奥さんは石井家の血筋を引いて、書はお上手、茶道や生花の技には練達で、「教授」の看板もかけられるお人ですが、...

篤子夫人は明治39年（1906年）生まれで、銑三氏が前の夫人（関根）文子さんと死別され、昭和15年に再婚されました。お二人の間にはお子さんはありませんでした。（前妻文子さんとの間にもお子さんはありませんでした）石井家の血筋というのは祖父に明治時代の日本画の大家である、石井鼎湖（1948—1897）伯父が石井柏亭（1882—1958 洋画家）叔父が石井鶴三（1887—1973 彫刻家・洋画家）



森篤子さん（手前）奥に松岡初子

という、いわば芸術一家のご出身ということです。反町氏が書かれているように茶道、華道、書画はお嬢様のたしなみ以上の域にあり、お茶とお花は鶴沼のお家で教室を開いておられました。大阪船場の商家のご出身で、そのような環境で育たれたせいか「はんなり」と立ち居振舞いも優雅な方でした。



通勤の車中の森氏（中央公論社）

昭和30年頃、森銑三氏から静岡県の由比町に住む松岡の縁戚の中川深雪（歌人・鍼灸師）を紹介して欲しいと依頼され、祖母初子と母がご一緒することになりました。母の思い出によると「森先生は汽車に乗るとお話をすることもなく景色を見るでもなく、往復ずっと新聞の折り込みチラシの裏に鉛筆で何か書かれていた。先方に着くと今度は深雪さんの話を聞きながらメモを取られ、ずいぶん多くの質問をされていた」ということです。このあたりも森氏の性格の一端があらわれて面白いと思いました。

チラシの裏に原稿を書くということについてはたしかに氏が生涯を通じて金銭に執着を持たず、清貧を貫かれていた、ですからノートや用紙を買うお金にも事欠いていたという見方もできるのですが、本来ものを大切に使うという精神の現われといえないこともないと考えられます。

とにかく原稿用紙だって、それを反古にする場合にも、そのまゝ屑籠に入れないで、裏表書いて、もう書く隙間がなくなってから捨てる、といふことをやります。一層紙が乏しくなったら、その上に毛筆で書いて、もう一度ノートなんかに使うかもしれません。

（中略）

帝国図書館にいつてゐた頃は、人から来た便箋の手紙の類などにも、裏を返して書留をつくりました。（中略）細字でありあはせの紙に、やたら書いて行きます。（書誌索引展望1972年5月小出昌洋氏との対談）

同時に森氏にとってはこの日帰りの小旅行も旅を楽しむなどということは全く念頭になかったことと思われます。

私は旅行も一向にしないが、旅行するにしても、人の好んで行こうとする名所や旧蹟を巡歴したいとは思わない。行く先々で埋もれている書物を尋ね、埋もれている人物の話でも聴いてきたい。（森銑三「書物」岩波文庫）

私が小学校一年の時に図画の時間に自動車の絵を描いて一重丸をもらってきました。他の生徒はほとんど三重丸、上手な子は花丸というのをもらったそうです。これに驚愕した祖母は（多分無理を言って）森篤子さんに私の絵の先生を頼んだのだと思います。そういうわけで私は週に1、2回森さんのお宅に絵を習いに行くことになりました。いくら上手な方に丁寧に教えていただいてもダメなものはダメ、一向に上手くなりませんでしたが3年間くらい教えていただきました。夏の一時期は反町家の方々が避暑に来られることもあり、そのような際は森夫妻はかわりに文京区の反町家に行かれていて、絵の稽古も休みとなりました。

森氏のお宅の印象は、とにかく静謐そのものでありました。森氏は在宅されていても自室から出られることはほとんどなくずっと机に向われていたようで、夫人が「今日は宅の主人がおりますのよ」と言われて察することができるものでした。森夫人は我が家の家庭麻雀につきあってしばしば我が家に来られましたが、森氏のために食事を用意してから出てこられていました。「主人は勉強しかいたしませんからわたくしが家を空けても何も申しませんのよ」と笑っておられました。

冒頭の反町氏との出会いから、30年以上森氏は反町氏の古書肆「弘文荘」に土日を除く毎日10時から4時まで勤務されていました。「数千冊の参考書を駆使して、自筆本、写本、版本あらゆる書物に精通した．．．」と反町氏が述べられていますが、森氏は勤務のない日、また帰宅の後も（おそらく通勤の行き帰りも）書物から離れることはありませんでした。

たまに道で森氏にお会いすることがありました。氏はお勤めの帰りは必ず

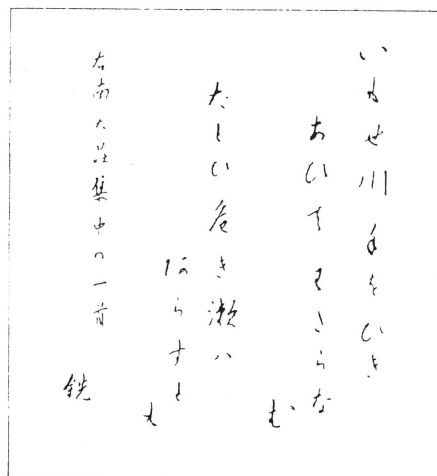
鵜沼海岸の駅から堀川道を通られていたようで、私の家の近くを通られていたからです。氏は長身を黒の背広に包まれ、いつも黒カバンにステッキ、ベレー帽といういでたちでありました。子供の私のご挨拶をすると、腰を折るようにかがめられ、まるで相手が大人であるかのように「たかしさん、本日はどちらへ」などとおっしゃられるので、私としてはちょっと照れてしまいます。そのようなわけで、時には氏の姿を発見すると路地に隠れてやり過ごし、歩き去られる後ろ姿を見送ったこともありました。

孤高の老学者はたそがれの堀川道をその長身からすればやや狭い歩幅で、それでもまっすぐに背筋を伸ばされ歩み去られていきました。

真に書物を愛する人は、敬虔な心の持ち主であらねばならぬ。また敬虔な心の持ち主にして、始めて真の書物愛好家たるべきである。（森銑三「書物」岩波文庫）

森 銑三（もり せんぞう）1895－1985 書誌学者

愛知県刈谷市生まれ。刈谷市図書館、名古屋図書館に勤務して古書に親しんだ後、1926（大正15）年文部省図書館講習所を卒業し、東大史料編纂掛に勤務した。早くから歴史の読み物を得意としたが、以後近世日本の文化・学術面に貢献した人物の典籍の研究



森氏の色紙。南天荘、井上通泰のうた

「いもせ川手をひきあひてわたらなむ

たとひ危き瀬はあらすとも」

に本格的に従事する一方で、伝記学会を創立して雑誌“伝記”を出版した。手堅い実証的な学風で、戦時中にも時局に媚びなかった。戦後「好色一代男」以外の作品の西鶴非作者説を発表して話題をよんだ。晩年は早大で書誌学を講じた。その著作は“森銑三著作集”12巻・別巻1（70－72年）にまとめられている。

（朝日人物事典による）

写されていた東屋の生活

宮田敏夫氏所蔵のアルバムから発見

高 三 啓 輔 （「鴿沼を語る会」会員）

鴿沼にあった文士宿『東屋』の様子を伝える資料は極めて乏しい。とくに関東大震災以前の旅館内部の生活を伝える資料は、これまでほとんど表に出たことがなかった。

このほど藤沢市本藤沢に住む宮田敏夫氏所蔵のアルバムの中に、震災直前の『東屋』の生活をうかがわせる写真が残っていたことがわかった。

その中から興味深く思われる写真4枚を48、49ページに紹介した。当時の女中さんたちの姿なども撮影されており、当時の風俗を示すものとしても貴重な資料かと思われる。

このアルバムを所蔵していた宮田敏夫氏は、1905年生まれで、現在94歳。いまもなおお元気で、本藤沢の長男・英夫氏宅で英夫氏の家族とともに過ごしておられる。

敏夫氏は、わが国の自転車産業界の基礎を作ったといってもいい宮田製作所（現宮田工業、本社茅ヶ崎市）の創業家につながる方で、敏夫氏自身、戦前からずっと同社の取締役を務め、とくに昭和23年からほぼ1年間は宮田製作所社長の地位にあって戦後復興に打ち込まれた。

この敏夫氏に2歳年上の兄・政夫という方がおられた。慶応義塾大学理財科（現経済学部）に進んだが、一方ではマンドリン奏者として名を馳せていた。大正末期から昭和初年にかけては、慶応義塾マンドリン倶楽部（K. M. C）のリーダーとして倶楽部の存在を日本でも有数のものに育てあげ、政夫氏自身も日本的な演奏家として高い評価を受けていた。

古い伝統を誇るK. M. Cは昭和43年6月、第100回の記念演奏会を開いたが、そのとき発行された倶楽部記念誌に、政夫氏のことが以下のように紹介されている。

「田中氏（引用者注 田中常彦のこと。日本マンドリン界の草分け的存在。イタリアに留学、マンドリンを学んだ）の卓越した技倆はその後輩に次々と世界的名プレーヤーつくっていった。宮田政夫、内田寅男（ともにマンドリン）、月村嘉孝（ギター）がそれであり……」

「宮田氏は外国にこそ行かなかったが、国内での活躍は田中氏にも劣らぬほどで、田中氏の後任野村徳一氏が退かれてからはK. M. Cの指揮台に上がり、

マンドリンにまけぬ指揮者ぶりを発揮した。そしてソリストとしてもステージを飾り、正に縦横無尽の大活躍であり、曲目もぐっと高踏的なものを選び、K. M. Cの水準向上を画された」

しかし、不幸なことに政夫氏は、当時死病といわれた結核に、若くしてとらえられてしまう。倶楽部記念誌はそのことを次のように書いている。

「昭和2年宮田氏は不幸にも病に倒れ、その後の養生の甲斐もなく、ついに同5年（1930）他界された。これこそ偉人の短命というのであろうか、K. M. Cの為のみならず、日本マンドリン界にとって惜しまれた」

この文章で政夫氏は昭和2年の発病とされているが、実際はその数年前から兆候はあったものと思われる。政夫氏は少なくとも関東大震災以前、つまり大正12年以前から東屋旅館の離れの二階に逗留しているからである。敏夫氏は「兄は慶応予科時代に体をこわした」といっておられる。つまり大正10年ごろには静養が必要な状態になっていたことになる。

政夫氏は大正9年以降昭和2年に至るまで、毎年のK. M. Cの定期演奏会でタクトをふったり、ゲストとして特別演奏をしたりしているが、恐らく演奏会前後は鵠沼で静養するということが多かったのではないと思われる。したがって倶楽部記念誌に「昭和2年に病に倒れ」たとあるのは、病状がいよいよ思わしくなくなった時期、ということではなかろうか。

政夫氏の東屋滞在中、多くの写真が撮られた。それは一冊のアルバムとなって残った。今回、紹介いただいたのがそれである。政夫氏が東屋滞在中、弟の敏夫氏もよくこの旅館に泊まりがけで遊びに行った。大正12年の時点で考えると政夫氏が20歳、敏夫氏は18歳ということになる。そして、この二人の若い兄弟は、東屋旅館で関東大震災に遭うのである。その時のことを敏夫氏はいまもなお鮮明に記憶されていた。それについては後に述べる。

※

この敏夫氏と同居されている子息の英夫氏が、最近、作家武林無想庵の自伝的小説『性欲の触手』の文章の一部を目にされた。

無想庵もまた東屋に滞在した文士の一人で、大正9年2月末から3月末にかけて東屋旅館に逗留している。後に彼の妻となる中平文子とは、この東屋旅館逗留中に、ともに宿泊客として運命的な出会いをするのである。『性欲の触手』はその出会いのいきさつに触れながら、当時の東屋旅館での日常を随筆風に、しかし極めて具体的に書いている。東屋旅館の歴史を知るうえでも、貴重な作品といえるものである。

この作品の中に、無想庵は旅館で「知り合いになった人」の一人として、病氣療養中の「三田の理財科の学生」を登場させているのである。

英夫氏は、この「三田の理財科の学生」を印象にとめられた。

無想庵の滞在時期などから推測して、ここに描かれた結核を病む「理財科の

学生」こそ父・敏夫氏の兄であり、英夫氏にとっては伯父にあたる政夫氏のことではないかと考えられたのである。そこで父・敏夫氏が所蔵されていたアルバムをもって、私どもの「鵠沼を語る会」を訪ねていただいたのだった。

しかし、結論からいうと残念ながら無想庵の作品に登場する「三田の理財科の学生」は、政夫氏のことではなかった。

無想庵は三田の理財科の学生の身の上について「これは南国の青年で」と書き、さらにこの学生が咯血したとき「急に国の母親や妹のことを思い出して、それから無上に死ぬのが怖ろしくなりました」と語ったことを書き留めているのである。“自転車の宮田”の一族として、東京に生まれ育った政夫氏とは明らかに違う境遇の学生と考えるべきであろう。つまりこの時期、東屋には少なくとも二人の「三田の理財科の学生」がいたということになる。

英夫氏の推測は必ずしも当てはまらなかったが、しかしお陰で私どもは東屋の貴重な写真を目にすることができたのである。

※

写真を見てみよう。

49ページ上の写真に写っている和服姿の青年が、宮田政夫氏である。この写真の時期を大正10年から同12年のころと推定すると、政夫氏の音楽活動が最も充実していた時代である。大正9年5月から同15年5月まで、K. M. Cの定期演奏会の指揮者はずっと政夫氏であり、ゲストとしても度々演奏している。政夫氏と一緒に写っている外国人がだれであるか特定することはできないが、この時期政夫氏は、ベッツォールド、ウイリス・バルダスなどという海外からの演奏家と共演していることが、「K. M. C略史年表」に記録してある。したがってこの写真の外国人もそうした演奏家の一人で、鵠沼の政夫氏を見舞いに来ていたということも考えられるのである。

なお、この外国人がすわっている籐椅子は、大正10年11月5日、東屋に滞在した大杉栄と佐藤春夫の会話に登場する椅子と同じ種類のものと推測できる。二人が会話した前日の4日、東京駅で時の首相原敬が刺殺されるという事件が発生した。その出来事の印象を大杉栄と佐藤春夫が佐藤の部屋で語り合い、そのさい大杉が暗い雰囲気払いのけるように「この部屋の籐椅子は僕がよその部屋から持ってきたものだよ」と多少おどけた調子でいうのである。大正10年前後といえば、東屋に大杉、春夫のほか宇野浩二、芥川龍之介らの文人が綺羅星のように集っていた時期である。政夫、敏夫のお二人はまさにこの文人たちと同宿していたのである。

49ページ下の写真は、同じく政夫氏への訪問客であろう。注目したいのは二人の男性の前にある箱火鉢である。この写真の時期よりもほぼ20年前の明治34年ごろ、東屋に滞在していた斎藤緑雨を訪ねて馬場孤蝶がやって来た。そのとき緑雨は箱火鉢を抱えて端然と部屋に座っていた、と孤蝶は描写している。そ

写されていた東屋の生活

(写真はいずれも大正11年ごろの撮影。宮田敏夫氏提供)



【写真上】

東屋客室での食事風景

食事の際はこの写真のように必ず女中さんが給仕についた。そのことは武林無想庵、里見弴らの小説にもはっきりと書かれている。写真の食事が朝食か夕食か判別できないが、卓上に汁椀と副食物三品が並んでいるのが見てとれる。客の人物がだれなのかは分からない。

【写真左】

東屋の女中さんの姿

東屋の女中さんが美人ぞろいだったという話は、当時を知る古老たちからよく聞かされる。その話を証明するのがこの写真であろう。上の写真の女中さんと併せてみても確かにその説はうなづける。写真の女中さんの帯締めが斜めになっていて、当時の風俗を忍ばせている。



【写真右】

旅館縁側の風景

後ろに立っているのが宮田政夫氏。東屋旅館にはこのような廊下が各棟の東、南側に造られていた。

外人が腰を下ろしている椅子は、佐藤春夫の作品に描かれた籐椅子と同種ものかと思われる。

【写真下】

客室内の風景

人物がだれであるかははっきりしない。中央の箱火鉢は、おそらく同種のものと思われるものが東屋に来た文人馬場孤蝶の文章にも登場する。

大震災以前の東屋旅館のこうした室内風景を記録した写真は、極めて珍しい。



の箱火鉢とこの写真の箱火鉢は同じ種類のものと思ってもいいだろう。100年も前の情景が、一枚の写真から急速に具体性を帯びてくる。ちなみに二人の男性客が敷いている座布団の柄と、上の写真の外国人が座っている籐椅子に敷いてある座布団も同じ柄である。東屋旅館は客に供する布団にも凝っていて、友禅縮緬や群内の夜具を出していたことが、無想庵の文章から知ることができる。

48ページの女中さんが写されている二枚の写真は、東屋関係の資料の中では初めて世に出るものではなかろうか。

東屋では食事の際、必ず女中さんがお相伴したことは、武林無想庵や里見蓐らの小説などに書いてはある。しかし、それがどんな情景だったのかは、この写真を見ることによって初めてはっきりと理解できた。先に述べた斎藤緑雨は東屋滞在中に昵懇となった女中さんと、後に実質的な結婚生活を送ることになるが、それも滞在中のこうした食事情景などから生まれたロマンスだったろうと想像できるのである。東屋旅館の女中さんは、美人が多いことでも有名だった。48ページ下の写真をみると、この女中さんからはあでやかな印象さえ受ける。若い文学者たちがこの旅館に群れ集った理由の一つには、こうしたあでやかな女中さんの存在があったのではなかろうか。

※

先にも述べたように宮田敏夫氏は東屋旅館に滞在中、関東大震災に遭遇した。たまたまその時、兄の政夫氏は藤沢に買い物に出掛けていて、敏夫氏だけが東屋旅館裏門近くにあった二階建の離れにいた。大きなひと揺れで瞬時に一階は潰れ、敏夫氏はうまい具合に二階から外へほうり出された。けがはなかった。

旅館の庭園にあった池から噴水状に水が吹き上がっていたのを覚えているという。東屋の庭園に噴水があったという記録はないから、恐らく地下水が噴き上げたものと思われる。敏夫氏は噴き上げる水の間をくぐってとりあえず海岸の砂地へ逃げた。浜には三、四人の人がいたが、間もなく江の島右側の海面がもくもくと盛り上がり波が押し寄せてくるのが見えた。「津波が来た」という叫び声で、こんどは急いで松林の中へ逃げ込んだ。以後、東京から助けがくるまでのほぼ一週間、松林の中に蚊帳を吊って寝泊まりした。食事は東屋旅館から届いたという。

敏夫氏は「ほんとに毎日お料理がでてくるわけです。いま考えてもおかしなくらい上等のものが毎日食べられました」という風に話された。

東屋旅館は、地震で全壊したといい伝えられているが、敏夫氏の話から考えると、調理場などの機能はすぐに回復したのであろう。

敏夫氏は貴重な写真を示しながら、「鵠沼を語る会」会員の前でこうした話をしてくださった。宮田敏夫氏に感謝するとともに、鵠沼の得難い歴史資料として止めておきたいと思う。

鵠沼公民館 主催

鵠っ子スクエア探訪スペシャル・同行記

(鵠沼南地区史跡めぐり)

「鵠っ子スクエア探訪スペシャル」は鵠沼公民館の青少年対象の催物で、今回は鵠沼歴史探訪のため鵠沼を語る会に協力依頼があって下記の通り行われた。

以下はその参加記録である。

日 時 5月8日(土) 午前9時30分～12時

参加者 11名(内 子供10-男6、女4 母親付き添い1)

主催者 公民館一寒河江氏、横田氏

案内説明 語る会一川上、伊藤、佐藤、内藤、松岡、中島会員

1. 9時30分に小会議室集合、まず佐藤会員が明治、大正、昭和期の地形図をもとにして地区内の地形の変化一時代と共に、砂丘が崩され松林が切られて自然が徐々に消失し、住宅化してゆく状況一について、分かりやすい言葉で適切な説明をした。
2. 史跡めぐりは公民館から南下し、国道134号線を渡り「鵠沼橋」、「ニー・アル記念碑」を見て国道をくぐり、北上して「東屋旅館裏門の跡」を経て、仲通りから「大曲り」を左折し海岸通りに出て更に北上し、江の電鵠沼駅前にある「賀来神社」にいたり、ここより折り返して南下し、湘南学園への通学路にある「松本陽松園跡(岸田劉生住居跡)」を見て、公民館までもどる約3キロ程の地区内をほぼ南北に歩くルートである。

3. 主要な説明ポイント

- (1)「鵠沼橋」—国道134号線の引地川に架かる橋際にとどまり、洪水のたびに引地川の流れが変わって、昔は河口が今よりももっと東側にあり流れが大きく蛇行していたこと、この近くの海浜が最初の海水浴場であったことを図面を示しながら内藤会員が説明した。
- (2)「ニー・アル(聶耳)記念碑」—若くして鵠沼海岸で水死した、中国現代音楽の天才作曲家「ニー・アル」を悼んで建立されたこと、有名な中華人民共和国の国歌「義勇軍行進曲」の作曲者でもあると、松岡会員が勇壮な行進曲のテープを聞かせながら説明した。(写真 A)



(写真 A) ニー・アル記念碑

- (3)「東屋旅館裏門の跡」—東屋旅館の歴史と規模と、旧敷地内を歩きながら現存する建物の一部や、入り口玄関跡を案内し、往時は多数の文人たちが逗留して活躍したことを内藤会員が説明した。(写真 B)
- (4)「大曲り」—江の電が開通して鵠沼駅が開発された鵠沼別荘地の交通の玄関口となり、駅から海岸までの直線道路の海岸道路が幅広の道として造られ、ここを右折して商店街につながる道が拡張されたが、この角の空地で関東大震災時、多数の犠牲者の遺体を荼毘(火葬)に付したことを内藤会員が説明した。
- (5)「賀来神社」—神社の由来、御神体、新たに開発した別荘地の氏神様として現在地へ遷座されたいきさつ、鵠沼別荘地開発に当たって功のあった伊東将行氏をたたえる開発記念碑等の説明を中島がした。
- 参加者たちは初夏の暑い日差しの中をあちこちと歩いたため、さすがにぐったりとなり境内の木陰にある石に座り、涼をとり持参した水筒の水を飲みながら話を聞いていた。
- (6)「松本陽松園跡」(岸田劉生住居跡)—賀来神社を折り返し湘南学園への通学路に接している、一群の貸別荘地の跡(松本陽松園跡)と、その入口の角にあった「麗子像」等で有名な天才画家の住居跡等を内藤会員が説明した。



(写真 B) 東屋旅館裏門の跡

途中賀来神社の前に予定していた、鵜沼駅の南で片瀬川に面した歴史的西洋館「渡辺邸」が先方の都合で見学できなかったことは残念であったが、ここを最後に、帰途につき公民館会議室に戻った。丁度午前11時で1時間の「史跡めぐり」であった。

部屋には内藤会員が自らの手で収集しまとめた、戦前、戦後間もない鵜沼の自然や海水浴場、プール、住宅地の地図や写真を展示し参加者に説明した。

参加者に主催者より感想を求めらて、わずか10名でもあり発言者も少なかったが、「今自分達が住んでいるところに、昔はいろいろなものがあったことが面白かった」とか、付き添いの母親より「他所から来たので、昔、鵜沼に大勢の有名な文人たちが滞在して活躍したこと等を初めて知って非常に勉強になった、今後は子供よりむしろ大人たちを案内してもらいたい」との発言あり。

ともあれ、初夏で暑かったがさわやかな気候に恵まれ、途中事故もなく半日の「鵜沼探訪」が、語る会会員の協力で無事に終わったことを喜ぶたい。

特に、多くの資料と詳細な「鵜沼別荘地探訪スペシャル資料」と「各ポイントの説明」を作成され、予定地以外にも歩きながら足を止めて、昔の寺や旅館、別荘、橋、郵便局、交番等の跡を示しながら話す「鵜っ子」内藤会員の、努力と熱意に敬意を表すると共に、「鵜沼を語る会」の役割を十二分に果たされたことに心から感謝したい。

(中島 記)

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成11年4月～11年9月)

中島 明

平成11年4月例会 4月13日(火) 10時～12時 18名出席

議題(1) 5月の総会の議題について

顧問を新たに置くことにし、会則に明示する。

(2) 東屋旅館について、その後の経過。

記念碑等の設置を、会長名で藤沢市長宛要望書を提出する。

(3) 平成11年度、第1回鵠沼公民館サークル交換会について。

永井さんより報告される。

平成11年5月8日(土) 鵠沼公民館主催「鵠っ子クラブ・探訪スペシャル」
に協力参加する。

平成11年度、第13回総会 5月11日(火) 10時～12時 17名出席
議事 別紙「第13回総会議案書」により審議し、議案書の通り可決される。

総会特記事項

1. 村木朝一新館長が、自己紹介を兼ねて挨拶される。
2. 新年度役員一川上会長、榛葉副会長、高木、寺田、関根顧問を選任。
3. 業務分担一従来のものを整理して、会長、副会長から担当を外し総務、企画、編集については責任者と補佐を一名ずつ置いて、企画、行事の内容に応じて互いに助け合う体制とする。なお、公民館関係については永井さん、佐藤さんが引き続いて担当する。
4. その他 経費節減のため、次月より例会通知を、遠方会員を除き、会長と総務担当が分担して会員のポストに投函配布する。

平成11年6月例会 6月8日(火) 10時～12時 15名出席

議題に入る前に、宮田敏夫氏(94才)が 長男英夫氏に付き添われて出席し、「東屋旅館」に関東大震災発生時に、兄政夫氏と共に滞在して被災された生々しい体験談を話される。(なお、詳細は本誌に掲載されている)

議題(1) 座談会について

「鵠沼本村について古老に聞く」日程 場所 6月29日(火)

午後2時～4時

運営方法(司会者、質問者、質問事項、記録担当等)を決める。

(2) 講演会について。

葉山 峻衆議院議員にお願いする。内容は「鵜沼の今昔」という政治色の無いもの。日程は党大会以後の9月11日（土）とする。

（3）会誌「鵜沼第79号」について

「本村座談会」が中心、他に「歴史的な家屋－内藤会員宅」、「宮田さんの震災体験談」等。

（4）公民館祭りについて

塩沢コレクションの展示一本とする。

（5）「東屋記念碑等の設置」の要望書提出について

5月19日に会長、中島が市役所を訪問し市長宛要望書を提出。

「鵜沼本村座談会」6月29日（火）に（午後2時～4時半）萬福寺で行う。

平成11年7月例会 7月13日（火）10時～12時 14名出席

議題（1）公民館祭りについて（10月23日、24日）

「塩沢コレクション展示」のため、7月19日（月）川上会長、有田、佐藤会員が塩沢宅を訪問し資料出展を依頼挨拶する。

（2）萬福寺における座談会の報告

上記日程にて開催、松岡会員の尽力で現在テープ起こし中で、内容不明、不用箇所等の解明、削除、訂正については、原稿完成次第編集委員会にて行う。

（3）葉山 峻氏講演会（公民館共催公開講座－9月11日予定）

チラシ原稿完成し公民館へ提出済み－公民館にてチラシ約200枚印刷配布、8月10日号広報「ふじさわ」に広告掲載手配中。

（4）学習サークル主催「シンポジウム」－10月30日に行う。

平成11年8月例会 8月10日（火）10時～12時 18名出席

高木顧問（前会長）夫人に付き添われ車椅子で出席される。議題に入る前に同氏より、怪我をされて病院へ入院し療養治療された経緯を話される。

議題（1）葉山 峻氏の公開講座について

同氏より突然の日程変更の連絡あり、早速公民館と調整を行い、開催日を9月23日（火）に変更決定。市広報の日程変更掲載もでき、内藤会員労作のチラシ原稿も訂正されて公民館に提出す。

（2）塩沢氏の資料の扱いについて

先の訪問の際、夫人より語る会で必要な資料は全て寄贈して下さるとのこと、8月31日（火）午前中に同宅3階に収納中の、

郷土史関係の書籍、地図、写真、資料等を有志で選別し、佐藤会員宅へ運び、分類作業をすみやかに行い内容を精査したうえで、公民館祭りの展示テーマ、展示物等を決定する。なお、終了後の各種諸資料の保管方法については後日の課題となる。

(3) 史跡見学会について

「本村」に決定。11月9日(火)例会の後で行う。担当者は榛葉副会長、林会員にお願いする。

(4) 公民館寒河江氏より、秋の「鴿っ子クラブ、探訪スペシャル」は「本村史跡めぐり」を、親子ペアで行いたいとの協力要請あり。

日程は11月23日(火)一勤労感謝の日。担当は榛葉副会長。

平成11年9月例会 9月14日(火) 10時～11時 19名出席
高木顧問、夫人に付き添われ車椅子で出席される。新会員一植松民也氏紹介。

(1) 公民館祭りについて

塩沢コレクションの、分類、カード作成が佐藤、野口、永井、川島会員のご努力で完成し、解説文、展示方法、その他については次回例会にて決定。その後はとりあえず西会員宅に保管してもらう。

(2) 葉山 峻氏の公民館との公開講座について

司会と挨拶は川上会長。館長、会長の挨拶後に公開講座に入る。「鴿沼を語る会」PRのため、ホール出口に会の案内チラシやPR揭示物を内藤会員が用意する。

(3) 公民館主催「鴿っ子クラブ探訪スペシャル第2回」について

詳細は、10月12日(火)例会時に打ち合わせする。

東屋記念碑設置について 出席者、市役所一鈴木主幹、篠崎課長補佐、村木館長
11時～12時 語る会一設立準備委員及び高木、関根顧問
市側より、会及び近代文学館の意向を容れた、記念碑、説明板、標柱を建てる計画案で約380万円の予算を立て、来春の議会で承認を得る予定との説明あり、会員から質疑もあったが、まず予算額を確保したうえで、改めて具体的な意見を出していただくとのこと。

平成11年9月23日(火)14時～16時 鴿沼公民館1階ホールにて、葉山 峻氏の「鴿沼を語る会」と公民館共催の公開講座が、「少年のころの鴿沼一鴿沼小学校時代」と題して行われ約130名の参加者があった。

＜塩沢コレクション＞によせて

有田 裕一（会員）

この度、「鵠沼を語る会」では、故塩沢務氏が長年にわたって蒐集・研究・記録された資料の多くをご遺族のご好意により譲り受けることにしました。

まず私たちは、そのボリュームに驚き、しかもその一つ一つが郷土史にとって貴重なものであることに目を見はりました。

この資料は今、公民館祭りに向かって整理・記録中ですが、その分野は多岐にわたり、郷土史としては、鵠沼を始め、藤沢、茅ヶ崎、鎌倉、寒川にわたり、鵠沼にかかわる文学関係、岸田劉生などの画家、民俗民話、そして多数の地図、さらに氏の専門とされた地震・防災関係、又、橋や馬に関しても多大な興味をお持ちだったようです。植物、特に絶滅視されている植物に関わる資料も多く、これは塩沢氏が幻と云われた鵠沼ランを発見された時から始まったものと思います。

氏と私との交流が始まったのは、この鵠沼ランを、どこかで見かけなかったか、と云う問い合わせと、その少し前、当時行方不明となっていた東久邇宮第二王子遭難碑と、その関東大震災の時、救助に活躍した鵠沼自警団について、深く関心を持たれ、度々お会いすることになってからです。

そして、その碑をついに芝白金の寺で発見されました。その里帰りを希望し、恒久的に保存出来るよう、公民館敷地内に移築したいと、署名運動、市議会への働きかけ、等努力したのですが、天皇に関する碑であることから、反対もあり、公費での実現はされませんでした。しかし数年後、とうとう氏は、旧吉村邸の一角に、移築に成功させてしまったのです。私が思うにおそらく氏の自費で行ったのではないのでしょうか。

この様に、塩沢氏は、疑問・関心を持った事は、もつれた糸をほどく様に、又途切れているかも知れない糸を探し求めて、熱心に歩き、我々にその答を残して下さいました。

氏は、昭和61年より、平成3年まで語る会の会長を務められたと記憶していますが、その間行った「鵠沼懐古展」は、費用もかかりましたが多くの見学者を集めたものです。

これらの資料は、私たち「鵠沼を語る会」のみならず、鵠沼地区、藤沢市、ひいては文学の世界にとっても、重要な事実を物語るものです。私たちは、これを大切に継承しなければなりません。

改めて、塩沢家の皆様方のご好意に厚くお礼申し上げる次第であります。

正 誤 表

本誌前号（第78号）の森山敬子氏の講演記録のなかに次の間違いがありましたので訂正します。

頁	行	誤	正
23	11	「田舎住ひの處女日記」	「田舎住居の處女日記」
"	16	"	"
24	7	"	"
2	2	"	"
40	10	"	"
25	下から 5	「嫁に行かぬ人」	「嫁にゆかぬ人」
"	" 2	"	"
40	12	"	"
41	17	「嫁にいかぬ人」	"
40	15	『スイートホーム』	『スエートホーム』
39	11	『エンゲージ』	『エンゲージ』
"	18	"	"
40	下から 10	"	"
41	3	『生ひたちの記』	『生ひ立ちの記』
32	下から 2	『惜春賦』	『惜春譜』
40	下から 7	"	"
41	3	高橋堂	京橋堂
24	7	8巻18号	8巻15号

以上、書名、作品名については原典について調べた結果です。

編集後記

* 鶴沼内藤家の建物の一部がアメリカからの輸入組立家屋で、関東大震災にもビクともせず、未だに残されていることは広く知られていました。本誌でも一つの歴史的建築物として是非取り上げたいと思っていましたところ、こんど内藤喜嗣氏が入会されましたのでさっそくお願いした次第です。家に残された伝承・資料や外部の専門資料を用い立派な調査ができあがりました。これによれば、内藤家の輸入組立家屋は、現存するわが国最古のものといって差し支えないとおもいます。

* 鶴沼には明治以降に療養地として開発された南部海岸地域以外に、現在の神明を中心いくつかの集落が古くからあり、これらを総称して本村といっています。そしてここには昔の組や講の名残として、多くの年中行事や生活習慣が行われています。会員の万福寺住職荒木ご夫妻を中心に近隣の方々にお集まり願い座談形式で自由にお話しいただきました。記録の松岡氏には大変お手数をおかけしましたが、おかげさまで話がはずみ博打のことまで聞かせていただきました。有り難うございました。

* そのほか、戦後すぐから亡くなられるまで引き続き鶴沼に住み、松岡家とも縁の深かった書誌学の権威森銃三氏の話、また一読者からの連絡により、大震災前の東屋の写真が発見され、ここにご紹介することができました。この方はたまたま震災当日東屋に宿泊していて直接地震津波を経験されたそうで、その時の貴重な体験もうかがうことができました。出版という媒体の力をしみじみ感じます。

* 以上、今回もまた内容の充実した第79号をお届けできましたが、巾掛作家の名が見えないのが一寸淋しい気がします。……（鈴木）

『鵠沼』 第79号

平成11年9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください。

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2001